

岩手県立博物館調査研究報告書 第38冊

Research Report of Iwate Prefectural Museum, vol. 38

春子谷地と高松公園芝水園の動植物

Flora and Fauna in Harukoyachi wetland, Takizawa city,
and Shisuien reedbed of Takamatsu Park, Morioka city

2025

岩手県立博物館

Iwate Prefectural Museum

刊行にあたって

岩手県立博物館は、昭和55年（1980年）10月の開館以来、県内外の貴重な資料や情報の収集保存・調査研究・展示活用に努め、岩手県の学術文化の拠点のひとつとして活動してまいりました。これらの活動の中で、調査研究は最も基本的なもののひとつで、研究機関としての博物館の機能において必要不可欠なものです。当館では、諸活動の内容や成果を岩手県民および日本全国の皆さまへ広くご報告・ご紹介するために『岩手県立博物館調査研究報告書』を刊行し、今回で38冊目となりました。

ここにご報告いたしますのは、令和4年度に当館生物部門が開催したテーマ展「水辺の生きもの」のための調査研究の一環として実施した、岩手県滝沢市の岩手山麓にある春子谷地と盛岡市の市街地内にある高松公園芝水園に生息する動植物に関する研究成果です。岩手県は大部分を山林が占めて平野が少なく、特に内陸部においてヨシ原などの湿性草原は極めて希少かつ貴重な環境です。この内陸部の2ヶ所は県内では比較的広く、かつ古い歴史を持つ湿性草原で、生物多様性の保全における重要性が広く認められています。まさに岩手県の遺産と言える自然環境を調査研究し後世まで存続できるように働きかけることは、岩手県立博物館が担うべき地域社会への大きな貢献であると考えます。

最後になりましたが、調査研究の実施と報告書の作成にあたり、関係各位、特に湿性草原を保全管理する滝沢市と盛岡市からご指導・ご協力を賜りましたことに対し厚くお礼を申し上げ、発刊の辞といたします。

令和7年3月

岩手県立博物館

館長 高橋 廣至

目 次

刊行にあたって

目次

1. 春子谷地の概要	高橋雅雄 ……………	1
2. 春子谷地の植物相の変化	鈴木まほろ ……………	6
3. 春子谷地のトンボ類	渡辺修二 ……………	16
4. 春子谷地の両生類と爬虫類	高橋雅雄・渡辺修二 ……………	19
5. 春子谷地の鳥類	高橋雅雄 ……………	21
6. 春子谷地の中型・大型哺乳類	鈴木まほろ・高橋雅雄 ……………	27
7. 春子谷地の保全上の課題と提言	鈴木まほろ ……………	41
8. 高松公園芝水園の概要	高橋雅雄 ……………	43
9. 高松公園芝水園の維管束植物相	鈴木まほろ ……………	45
10. 高松公園芝水園で確認された昆虫類	渡辺修二 ……………	52
11. 高松公園芝水園の鳥類	高橋雅雄・熊谷淳一 ……………	54
12. 高松公園芝水園の哺乳類	高橋雅雄 ……………	71
13. 高松公園芝水園の保全上の課題と取り組み	高橋雅雄 ……………	76

謝辞

1. 春子谷地の概要

高橋 雅雄

春子谷地は岩手山麓南東面の標高450 m、北緯39°47'58"、東経141°02'14"に位置する約16 haの自然湿原である。北に向かってV字状に広がり（図1）、短い西部は背丈が低い湿性草原で（写真1-3）、中央部には沼があり（写真4-6）、長い東部は背丈1-2m程度の疎らなヨシ原が広がり（写真7-9）、小さな沼や北東方向へ流れる小川がある（写真10-12）。岩手県内で特に長く存続している湿原の1つで（約13,400年前に成立したと推定された：吉田・吉木 2008）、湿性草原の貴重な生物が多数生息していることから、岩手県の自然環境保全地域および滝沢市の天然記念物に指定されて法的に保護され、許可外の人の立ち入りが禁止されている。

春子谷地の生物相については、滝沢村教育委員会により1993年～1994年に主に昆虫類について、春子谷地生物相調査グループにより2007年～2009年に主に維管束植物・蘚苔類・変形菌類・昆虫類・トビムシ類・ササラダニ類・鳥類について網羅的に調べられ報告されている（滝沢村教育委員会 1995, 春子谷地生物相調査グループ 2008, 岩手

県立博物館・春子谷地生物相調査グループ 2010)。しかしながら、未調査の分類群もあり、既報の分類群でも最近の生息状況は明らかではない。

本研究では、2020年～2023年に岩手県立博物館が実施した野外調査において、未調査だった中型・大型の哺乳類について詳細な生息調査を実施した。また、維管束植物とトンボ類について各種の近年の生育・生息状況をまとめ、鳥類について網羅的な生息調査を再度実施した。両生類と爬虫類についても得られた観察情報をまとめた。これらの現状や変化から、春子谷地の保全的価値を評価し、保全上の課題について論じた。

引用文献

- 春子谷地生物相調査グループ（編）（2008）春子谷地生物相調査報告書。春子谷地生物相調査グループ，盛岡。
- 岩手県立博物館・春子谷地生物相調査グループ（編）（2010）岩手県立博物館調査研究報告書第25冊 春子谷地生物相調査報告書2。岩手県立博物館，盛岡。
- 滝沢村教育委員会（編）（1995）岩手県滝沢村文化財調査報告書 第29集 春子谷地湿原 昆虫および小動物。滝沢村教育委員会，滝沢。
- 吉田明弘・吉木岳哉（2008）岩手山南東麓春子谷地湿原の花粉分析からみた約13,000年前以降の植生変遷と気候変化。地理学評論 81: 228-237。

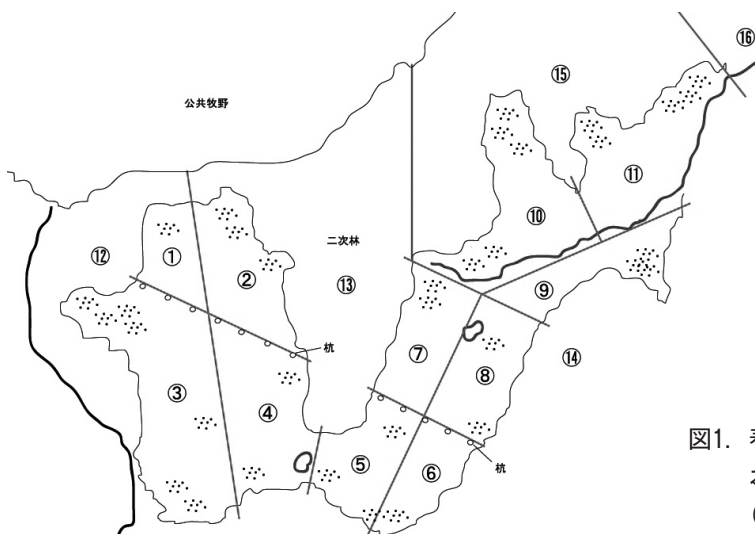


図1. 春子谷地の外形。春子谷地生物相調査グループ（2008）および岩手県立博物館・春子谷地生物相調査グループ（2010）より転載。



写真1. 2021年5月25日の西部の湿性草原環境の様子.



写真2. 2021年7月17日の西部の湿性草原環境の様子.



写真3. 2020年10月17日の西部の湿性草原環境の様子.



写真4. 2021年5月25日の中央部の湿性草原環境内の沼の様子.



写真5. 2020年7月22日の中央部の湿性草原環境内の沼の様子.



写真6. 2020年10月17日の中央部の湿性草原環境内の沼の様子.



写真7. 2020年7月22日の東部の湿性草原環境の様子.



写真8. 2020年7月22日の東部の湿性草原環境の様子.



写真9. 2020年10月17日の東部の湿性草原環境の様子.



写真10. 2021年5月25日の東部の湿性草原内の沼の様子.



写真11. 2020年6月17日の東部の湿性草原内の沼の様子.



写真12. 2020年6月17日の東部の湿性草原内の小川の様子.

2. 春子谷地の植物相の変化

鈴木 まほろ

調査の目的

春子谷地には、本州では生育地が極めて少ない北方系の植物、例えばシロミノハリイ *Eleocharis margaritacea*、ホロムイクグ *Carex oligosperma* subsp. *tsuishikarensis*、イトナルコスゲ *Carex laxa* などが多数生育している（鈴木・小水内 2008, 2010）。また、岩手県内では生育地が限られるホソバナシバナ *Triglochin palustris*、ヒメタヌキモ *Utricularia minor*、ヒメミクリ *Sparganium subglobosum* なども確認されている（鈴木・小水内 2008）。

しかし、鈴木（2008）が詳述したように、春子谷地の湿原植生には1980年代から変化が続いている。特に近年、東部でハンノキ林の拡大が著しく、湿原の面積が急速に減少しており、その影響が危惧される。そこで本研究では、2010年以降の植物相の変化を把握することを目的として、植生の全体的な変化を記録し、合わせて過去に記録された絶滅危惧種を中心に生育確認を行った。

調査方法

2020年～2022年の6月～9月に年1～2回、湿原の内部を広く踏査し、目視により植生の全体的な変化と確認した維管束植物の種名を記録した。調査は2020年6月17日、2021年5月1日、9月7日、2022年8月24日に行った。

調査結果

1) 植生の変化

図2に示すように、鈴木（2008）でも指摘されていた、湿原東部の北を南東へ向かって流れる水流イの周囲と、ウの南端部分でハンノキ林の拡大が著しく、今回の調査では、北部と南部の両方でハンノキが湿原を分断するように進出

していることが分かった（写真13）。中央部にある、水位が高く水が滞留している場所では、大きな変化は見られなかった。

一方、湿原西部ではハンノキがわずかに増えているものの、東部に比べると大きな変化は見られなかった。

2) 絶滅危惧種の生育確認

春子谷地の維管束植物目録（鈴木・小水内 2010）において湿原内部と周縁部に生育するとされた種のうち、岩手県レッドリスト2024（岩手県 2024）で絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類に掲載されている種は表1のとおり17種であった。

生育を確認することができた種は表1-アに示す13種で（写真14-23）、イトナルコスゲは2008年の調査時と同様に個体数が少なかったが、他は多数の個体が見られた。

一方、表1-イに示すとおり、絶滅危惧Ⅰ類のヒメミクリ、絶滅危惧Ⅱ類のヤナギトラノオ *Lysimachia thyrsoiflora*、サワラン *Eleocharis japonica*、ミズチドリ *Platanthera hologlottis* は確認できなかった。

3) 新たに確認した種

維管束植物目録（鈴木・小水内 2010）に掲載されておらず、今回の調査で初めて確認された種は外来種のアメリカセンダングサ *Bidens frondosa* であった（写真24）。湿原東部の南端（図1⑥）で拡大中の若齢ハンノキ林の下で、ヤノネグサ *Persicaria muricata* などに混じって生育していた。ヤノネグサは鈴木・小水内（2010）では湿原東部の北端（下流部：図1⑪）の水流中で発見したが、今回の調査では、最上流部にあたる南端でも多数生育していることが確認された（写真25）。

考察

1) 確認できなかった絶滅危惧種

今回の調査で確認できなかったヒメミクリ、ヤナギトラノオ、サワラン、ミズチドリのうち、ミズチドリは鈴木・小水内（2008, 2010）においても標本で確認したのみで、現地では確認できなかった種であり、春子谷地では既に絶滅したと考えられる。

他の3種は2010年までの現地調査で確認できていたものの、いずれも個体数が非常に少なかった種であった。ヒメミクリは2010年に水流周辺の林縁で開花を確認した（写真26）が、その地点は現在ハンノキ林下となっている。今回の調査では時間をかけて周囲を探索したが発見に至らず、植生の変化によって消失した可能性が高いと考えられる。岩手県におけるヒメミクリの確実な生育地はごく少なく、県内での絶滅が強く危惧される。

またヤナギトラノオも林縁に生育していたため、現在は植生変化によって消失している可能性がある。一方で、湿性草原に生えるサワランは開花期でなければ発見が困難な種であり、今回は確認できなかったものの、過去に確認した箇所に大きな植生変化は起きていないので、まだ生育している可能性がある。

2) 新たに確認した種・増加した種

今回の調査により春子谷地で新たに生育が確認されたアメリカセンダングサと、新たな生育地点が確認されたヤノネグサは、ともに水田・ため池などの富栄養な低湿地に多い植物であり、貧栄養な湿地を好む植物が優占している春子谷地の中央部ではこれまで見られなかった種である。

ハンノキ林が急拡大する湿原東部の南端でこの両種が新たに確認されたことは、この場所の富栄養化が進んでいることを示唆している。原因としては、隣接する斜面上部の別荘地と牧草地から、雨水や地下浸透水が流れ込んでいる可能性が考えられる。

このまま富栄養化の影響が湿原中央部へ拡大すると、絶滅危惧I類のヒメタヌキモ、イトナルコスゲ、シロミノハ

リイ、イヌノヒゲ *Eriocaulon miquelianum*、絶滅危惧II類のホソバナシバナなどが絶滅する恐れがある。また、湿地と別荘地・牧草地の境界には特定外来種のオオハンゴンソウ *Rudbeckia laciniata* やアレチウリ *Sicyos angulatus*（写真27）が繁茂しているため、湿地の富栄養化によってこれらの外来種が侵入しやすくなり、生態系や植物相に多大な影響を与えることが予想される。

表1のアにおいてトキソウ *Pogonia japonica* とした植物は、その形態的特徴から、2017年に記載されたミヤマトキソウ *P. subalpina*（Yukawa & Yamashita 2017）の可能性がある。ただし、個体間に変異が見られることから、正確に識別するにはなお精査が必要である。

引用文献

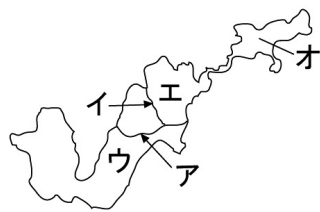
- 岩手県（2024）岩手県レッドリスト2024. <https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html>（参照2025年2月19日）
- 鈴木まほろ（2008）春子谷地の過去と現在. 春子谷地生物相調査グループ（編）春子谷地生物相調査報告書. pp.55-58. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.
- 鈴木まほろ・小水内正明（2008）春子谷地の植物相. 春子谷地生物相調査グループ（編）春子谷地生物相調査報告書. pp.4-6. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.
- 鈴木まほろ・小水内正明（2010）春子谷地の植物相II. 岩手県立博物館・春子谷地生物相調査グループ（編）岩手県立博物館調査研究報告書第25冊 春子谷地生物相調査報告書2. pp.3-11. 岩手県立博物館, 盛岡.
- Yukawa T & Yamashita Y（2017）*Pogonia subalpina*（Orchidaceae）: a new species from Japan. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Tokyo Series B（Botany）43(3): 79-86.

表1. 春子谷地の維管束植物目録（鈴木・小水内 2010）において湿原内部と周縁部に生育するとされた種のうち、岩手県レッドリスト2024で絶滅危惧Ⅰ・Ⅱ類に掲載されている種.

ア 今回の調査で生育が確認された種		
岩手県RLカテゴリー	和名	学名
絶滅危惧Ⅰ類	ヒメタヌキモ	<i>Utricularia minor</i>
	イトナルコスゲ	<i>Carex laxa</i>
	シロミノハリイ	<i>Eleocharis margaritacea</i>
	イヌノヒゲ	<i>Eriocaulon miquelianum</i>
絶滅危惧Ⅱ類	ナガボノワレモコウ	<i>Sanguisorba tenuifolia</i>
	キセルアザミ	<i>Cirsium sieboldii</i>
	ホザキノミミカキグサ	<i>Utricularia caerulea</i>
	ムラサキミミカキグサ	<i>Utricularia uliginosa</i>
	ヌマクロボスゲ	<i>Carex meyeriana</i>
	ホロムイクグ	<i>Carex oligosperma</i> subsp. <i>tsuishikarensis</i>
	ホソバノシバナ	<i>Triglochin palustris</i>
	ミズトンボ	<i>Habenaria sagittifera</i>
	トキソウ	<i>Pogonia japonica</i>
	イ 今回の調査で生育が確認されなかった種	
岩手県RLカテゴリー	和名	学名
絶滅危惧Ⅰ類	ヒメミクリ	<i>Sparganium subglobosum</i>
絶滅危惧Ⅱ類	ヤナギトラノオ	<i>Lysimachia thyrsoiflora</i>
	サワラン	<i>Eleocharis japonica</i>
	ミズチドリ	<i>Platanthera hologlottis</i>



A 1948年



B 2005年



図2. 春子谷地の輪郭の変化. 国土地理院が提供する航空写真（左）から湿原の輪郭と水流の位置を描いた図（右）. Bの右図で黒く塗った部分がハンノキ林の進出拡大が近年著しい場所を示す.



写真13. 湿原のV字底部から東部の南端を見ると、ハンノキ林が右（南）から左（北）へ進出してきていることが分かる（2021年5月1日撮影）。



写真14. ヒメタヌキモ（2021年9月7日撮影）。



写真15. イトナルコスゲ（2020年6月17日撮影）。



写真16. イヌノヒゲ（2021年9月7日撮影）。



写真17. キセルアザミ (2022年8月24日撮影).



写真18. ホザキノミミカキグサ(2021年9月7日撮影).



写真19. ムラサキミミカキグサ(2021年9月7日撮影).



写真20. ヌマクロボスゲ (2021年9月7日撮影).



写真21. ホロムイクグ (2020年6月17日撮影).



写真22. ミズトンボ (2022年8月24日撮影).



写真23. トキソウ (2020年6月17日撮影).



写真24. アメリカセンダングサ (2021年9月7日撮影).



写真25. ヤノネグサ (2022年8月29日撮影).



写真26. ヒメミクリ (2010年8月26日撮影).



写真27. アレチウリ (2021年9月7日撮影).

【春子谷地で観察された代表的な湿性草原植物】



写真28. ウキゴケ (2023年4月10日撮影).



写真29. ヒツジグサ (2021年9月7日撮影).



写真30. ウメバチソウ (2021年9月7日撮影).



写真31. ハイヌツゲ (2021年10月25日撮影).



写真32. エゾリンドウ (2022年8月29日撮影).



写真33. ミツガシワ (2021年5月25日撮影).



写真34. サワギキョウ (2022年8月24日撮影).



写真35. フトヒルムシロ (2020年6月17日撮影).



写真36. ミズバショウ (2022年4月23日撮影).



写真37. サギスゲ (2020年6月17日撮影).



写真38. カキラン (2020年7月22日撮影).

3. 春子谷地のトンボ類

渡辺 修二

調査方法

2021年と2022年の6月～9月におおよそ月1回のラインセンサスを実施し、10-12時頃に湿地内を同一ルートで踏査し（図3）、目視で確認したトンボ類を記録した。

調査結果

ラインセンサスでは3科13種を確認し（表2、写真39-50）、ほかにコサナエ *Trigomphus melampus*（写真51）とヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata*（写真52）の生息も確認したため、確認種数は3科15種だった。1999年～2004年に行われた調査（沼宮内 2008）で確認された7科25種よりは少なかったが、今回は調査範囲が狭く回数も少ないことが影響したと考えられ、春子谷地のトンボ相の変化を示す結果ではないだろう。沼宮内（2008）が「春

子谷地を象徴する種」として挙げたモートンイトトンボ *Mortonagrion selenion*、カラカネイトトンボ *Nehalennia speciosa*、エゾイトトンボ *Coenagrion lanceolatum*、オゼイトトンボ *C. terue*、ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea*、ハラビロトンボ *Lyriothemis pachygastra* は今回の調査でも確認された。また、アジアイトトンボ *Ischnura asiatica* は今回初めて記録されたが、2022年7月の1回だけであった。

引用文献

沼宮内耕作（2008）春子谷地にけるトンボ目の記録. 春子谷地生物相調査グループ（編）春子谷地生物相調査報告書. pp. 24-26. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.

表2. ラインセンサスで確認されたトンボ類.

	2021年				2022年			
	6月 17日	7月 17日	8月 19日	8月 27日	6月 27日	7月 25日	8月 24日	9月 27日
ホソミオツネイトンボ <i>Indolestes peregrinus</i>					*			
アオイトトンボ <i>Lestes sponsa</i>			****	**	*	*	**	**
カラカネイトトンボ <i>Nehalennia speciosa</i>		*				*		
キイトトンボ <i>Ceriagrion melanurum</i>		*	**	**		****	*	
エゾイトトンボ <i>Coenagrion lanceolatum</i>	*				**			
オゼイトトンボ <i>Coenagrion terue</i>	*	**			**	**		
モートンイトトンボ <i>Mortonagrion selenion</i>	****	***			***	***		
アジアイトトンボ <i>Ischnura asiatica</i>						*		
ノシメトンボ <i>Sympetrum infuscatum</i>			****	****		****	****	**
アキアカネ <i>Sympetrum frequens</i>		*	****	****		****	****	***
マイコアカネ <i>Sympetrum kunckeli</i>				**				
ハッチョウトンボ <i>Nannophya pygmaea</i>	**	****	**	*	****	***	*	
ハラビロトンボ <i>Lyriothemis pachygastra</i>	****	****		**	****	****	**	

1-2頭: * 10頭未満: ** 30頭未満: *** 30頭以上: ****



図3. ラインセンサスのルート. Google Mapより作図.
画像©2021Google, 画像©2021CNES/Airbus, Maxar
Technologies, 地図データ©2021.



写真39. 連結するホソミオツネトンボ (2021年6月17日撮影).



写真40. 連結するアオイトトンボ (2021年8月19日撮影).



写真41. カラカネイトトンボの雄 (2022年7月26日撮影).



写真42. キイトトンボのペア (2022年7月25日撮影).



写真43. エゾイトトンボ (2021年5月25日撮影).



写真44. オゼイトトンボの雄テネラル (2022年5月17日撮影).



写真45. モートンイトトンボ (2022年6月27日撮影).



写真46. マイコアカネの雄 (2021年8月27日撮影).



写真47. ハッチョウトンボの雄 (2021年6月17日撮影).



写真48. ハッチョウトンボの雌 (2021年6月17日撮影).



写真49. ハラビロトンボの雄未成熟 (2022年6月27日撮影).



写真50. ハラビロトンボの雄 (2022年6月27日撮影).



写真51. ナカムラオニグモに捕食されるコサナエ (2022年5月17日撮影).



写真52. ヨツボシトンボ (2021年5月25日撮影).

4. 春子谷地の両生類と爬虫類

高橋 雅雄・渡辺 修二

調査方法

2020年～2023年に高橋と渡辺が湿原内に立ち入った際に目視確認した両生類と爬虫類を記録した。また、後述の「5. 春子谷地の鳥類」での夜間の自動録音において、録音されたカエル類の音声を判別した。なお、分類と学名は日本爬虫両棲類学会（2024）に拠った。

調査結果

以下の両生類5種と爬虫類1種が記録された。

両生綱

- ・トウホクサンショウウオ *Hynobius lichenatus*

2022年10月26日に渡辺が湿原内で幼体1匹を採集した。

- ・アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster*

2021年9月21日に渡辺が湿原東部で幼体1匹を確認した（写真53）。

- ・ヤマアカガエル *Rana ornativentris*

2023年4月28日に湿原内の沼沢で複数の卵塊と孵化した幼生を確認した（写真54）。

- ・ツチガエル類（ツチガエル *Glandirana rugosa* またはムカシツチガエル *G. reliquia*）

2020年～2021年の5月～8月の録音データに多数の音声記録された。なお、後者は2022年に新種記載され、両者の差異は分布と幼生の腹面腺の状態である（Shimada *et al.* 2022）。当地は両種の分布の境界に位置するため産地を基にした種同定は困難で、形態的差異である幼生の腹面腺の状態を確認する必要がある。

- ・モリアオガエル *Zhangixalus arboreus*

2020年6月25日に湿地の縁の藪で成体1匹を確認した（写真55）。

爬虫綱

- ・シマヘビ *Elaphe quadrivirgata*

2020年7月22日に湿原内を移動する1匹を確認した（写真56）。

考察

本研究において両生類5種と爬虫類1種が記録された。前述のようにツチガエル類は幼生の形態的差異に基づいて種を確定させる必要があった。また、滝沢村教育委員会（1995）はアカハライモリ・ツチガエル・モリアオガエル・シマヘビ・ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* を、中村（2008）はアカハライモリとモリアオガエルの生息を報告している。本研究ではヤマカガシは確認できなかったが他は確認でき、新たにトウホクサンショウウオとヤマアカガエルを確認した。すなわち、春子谷地では両生類5種と爬虫類2種が現在までに記録されたことになる。さらに、各種の分布および生息環境から、以下の両生類6種と爬虫類3種も当地に生息している可能性があり、今後の調査研究でその生息の有無を確かめるべきと考える。

両生綱

- ・クロサンショウウオ *H. nigrescens*
- ・アズマヒキガエル *Bufo formosus*
- ・ニホンアマガエル *Dryophytes japonicus*
- ・タゴガエル *R. tagoi*

- ・ダルマガエル *Pelophylax porosus* (亜種トウキョウダルマガエル *P. p. porosus*)
- ・シュレーゲルアオガエル *Z. schlegelii*

爬虫綱

- ・アオダイショウ *E. climacophora*
- ・ヒバカリ *Hebius vibakari*
- ・ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii*

引用文献

中村学 (2008) 春子谷地の水生大型無脊椎動物相. 春子谷地生物相調査グループ (編) 春子谷地生物相調査報告書.

pp.21-22. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.

日本爬虫両棲類学会 (2024) 日本産爬虫両生類標準和名リスト (2024年3月11日版). <https://herpetology.jp/wamei/> (参照2025年2月19日)

Shimada T, Matsui M, Ogata M, Miura I, Tange M, Min MS & Eto K (2022) Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae). *Zootaxa* 5174(1): 25-45.

滝沢村教育委員会 (編) (1995) 岩手県滝沢村文化財調査報告書 第29集 春子谷地湿原 昆虫および小動物. 滝沢村教育委員会, 滝沢.



写真53. 2021年9月21日に湿原内で観察されたアカハライモリの幼体.



写真54. 2023年4月28日に湿原内で観察されたヤマアカガエルの卵塊.



写真55. 2020年6月25日に湿地の縁の藪で観察されたモリアオガエル.



写真56. 2020年7月22日に湿原内で観察されたシマヘビ.

5. 春子谷地の鳥類

高橋 雅雄

調査方法

1) ルートセンサス：2021年の5月～7月に月1回、天候が穏やかな日の早朝に、湿原内を西端→中央部北端→東端→中央部南端の順に2時間程度ゆっくりと歩き、目視および音声の聞き取りにて確認した鳥を地図上に記録した。2021年5月25日5:20-7:25、6月17日5:30-7:20、7月17日5:55-7:55に実施した。確認した鳥は種毎に個体数を集計した。また、2020年6月17日9:15-14:00に同様のルートで立ち入った際に観察・記録した鳥のデータも含めた（個体数は記録していなかった）。なお、分類と学名は日本鳥学会（2024）に、レッドリストのランクは環境省（2020）と岩手県（2024）に拠った。

2) 夜間の自動録音：2020年と2021年にタイマー録音機能を有するICレコーダー（Panasonic RR-XS470）を、湿原内に設置した。ICレコーダーは防風防水のため簡易ケースと布袋に収容し、湿原内に生える立ち木に紐で結んで固定した。2020年は西部と東部にそれぞれ1台を6月25日に設置し（写真57-58）、10月17日に回収した。録音は週2日（西部：火曜日と土曜日；東部：月曜日と木曜日）で、3時間（19:30-22:30）が記録されるようタイマーを設定した。2021年は湿地内の西部・東部の中側・東部の東側にそれぞれ1台を5月6日に設置し（写真59-61）、9月14日に回収した。録音は週2日（月曜日と木曜日）で、中央部の1台は3時間（19:00-22:00）、他2台は2時間（19:00-21:00）が記録されるようタイマーを設定した。録音データは回収後に内容を確認し、特に夜行性種の発声の有無を集計した。強風や強雨の日のものは解析しなかった。

3) カメラトラップ調査：後述の「6. 春子谷地の哺乳類」にて実施したカメラトラップ調査にて撮影された鳥類を選別し、種を可能な限り同定して撮影された鳥類を集計した。

調査結果

1) ルートセンサス：2020年6月17日に18種、2021年5月25日に27種、6月17日に19種、7月17日に18種の計36種を確認した（表3）。そのうち環境省レッドリスト2020および岩手県レッドリスト2024の掲載種は、クイナ *Rallus indicus*（岩手県：準絶滅危惧）、ハリオアマツバメ *Hirundapus caudacutus*（岩手県：留意）、カッコウ *Cuculus canorus*（岩手県：留意）、ノスリ *Buteo japonicus*（岩手県：留意）、オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos*（岩手県：留意）・コサメビタキ *Muscicapa dauurica*（岩手県：留意）の6種だった。特筆すべき観察として、2020年6月17日にモズ雌1羽の巣材運搬行動を湿原の中央部南側で観察し、この周辺で営巣したと考えられた。また、クイナは湿原東部の中側と東側の2ヶ所で激しい発声を確認され、音声プレイバックによく反応した。すなわち、クイナは少なくとも2つがいが生息していると推察された。

2) 夜間の自動録音：2020年は西部：7月4日～8月15日；東部：7月2日～8月20日で録音データが得られた。夜行性鳥類では、西部ではオオジシギ *Gallinago hardwickii*（環境省：準絶滅危惧；岩手県：絶滅危惧Ⅱ類；7月4日：1日間）とクイナ（7月4日～8月15日：12日間）が、東部ではクイナ（7月2日～8月10日：10日

間)が確認された。2021年は5月6日～8月19日で録音データが得られた。西部ではオオジシギ(5月17日～7月12日:10日間)・クイナ(6月17日～7月19日:6日間)・ゴイサギ*Nycticorax nycticora*(岩手県:準絶滅危惧;5月31日:11日間)・フクロウ*Strix uralensis*(岩手県:留意;6月21日:1日間)・トラツグミ*Zoothera aurea*(5月24日:1日間)が確認され、オオジシギの発声が特に多かった。東部の中側ではオオジシギ(5月17日～7月8日:3日間)・クイナ(5月31日～8月5日:14日間)・フクロウ(5月6日～6月21日:4日間)が確認され、クイナの発声が特に多かった。東部の東側ではオオジシギ(5月6日～7月19日:10日間)・クイナ(5月17日～8月5日:17日間)・フクロウ(5月17日～6月21日:5日間)・トラツグミ(5月24日:1日間)が確認され、オオジシギとクイナの発声が多かった。なお、小型哺乳類のニホンジネズミ*Crocidura dsinezumi*の発声が東部中側(2021年7月1日)と東部東側(2021年5月31日・6月3日)で記録された。

3) カメラトラップ調査:2021年のカメラトラップで、カルガモ*Anas zonorhyncha*:3枚(写真62)・ジシギ類(オオジシギと推察される):1枚(写真63)・アオサギ*Ardea cinerea*:72枚(写真64)・ノスリ:1枚・ハシボソガラス*Corvus corone*:42枚が撮影された。

考察

本研究で、ルートセンサスで36種、夜間の自動録音で5種、カメラトラップ調査で5種の計40種が確認された。先行研究(伊達 2008, 2010)では42種が記録されており、そのうち11種(アカゲラ*D. major*・コガラ*Poecile montanus*・ヒバリ*Alauda arvensis*・ツバメ*Hirundo rustica*・センダイムシクイ*Phylloscopus coronatus*・メボソムシクイ*P. xanthodryas*・アカハラ*Turdus chrysolaus*・コルリ*Larvivora cyane*・シメ*Coccothraustes coccothraustes*・ホオジロ*Emberiza cioides*・ノジコ*E.*

sulphurata)が本研究では確認されず、新たに9種(カルガモ・ハリオアマツバメ・ゴイサギ・アオサギ・フクロウ・アオゲラ*Picus awokera*・オオアカゲラ・オオムシクイ*P. examinandus*・トラツグミ)が確認された。確認されなかった11種の中で、特にノジコ(環境省:準絶滅危惧;岩手県:留意)は春子谷地での未確認が岩手県での減少を象徴している可能性があり注視すべきである。アカハラも全国的に減少傾向だが(植田・植村 2021)、本研究では湿原では確認できなかったが北側に隣接する牧野周辺では確認された。

新たに確認された9種のうち、ハリオアマツバメ・ゴイサギ・フクロウ・オオアカゲラは岩手県レッドリスト2024の掲載種で、生息が確認できた意義は大きい。ゴイサギ・フクロウ・トラツグミは夜行性のため、夜間の自動録音が確認に効果的だった。

伊達(2008, 2010)は春子谷地で特筆すべき種としてオオジシギとクイナの2種を挙げている。本研究でも両種は確認され、オオジシギについては、伊達(2008, 2010)は湿原の西端と東端で確認しているが、本研究では西部・東部の中側と東側のいずれでも確認した。ただし、伊達(2008, 2010)は日中の目視調査、本研究での確認は夜間の自動録音で、夜行性の本種の確認には本研究の方法が優れているため、生息数の増減は判断できなかった。クイナについては、伊達(2008, 2010)は湿原東部の東側で確認しているが、本研究では東部の中側と東側の2ヶ所で確認しており、生息地点(およびつがい数)が増えた可能性があった。なお、両年合わせて、オオジシギは5月上旬～7月中旬に、クイナは5月中旬～8月中旬に発声が確認され、それぞれの自動録音での適切な調査時期が明らかとなった。

春子谷地はオオジシギとクイナを含めた湿性草原棲の鳥類にとって岩手県内では希少な生息環境であり、周辺の森林に生息する種にとっても採餌や水辺利用等で重要な環境である。特にオオジシギとクイナ、そして本研究では確認できなかったノジコについて、その生息状況を今後も継続的にモニタリングする必要があるだろう。

引用文献

伊達功（2008）春子谷地湿原における繁殖期の鳥類. 春子谷地生物相調査グループ（編）春子谷地生物相調査報告書. pp. 53-55. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.

伊達功（2010）春子谷地の繁殖鳥類 補足 -クイナとオオジシギを中心に-. 岩手県立博物館・春子谷地生物相調査グループ（編）岩手県立博物館調査研究報告書第25冊 春子谷地生物相調査報告書2. pp. 30-31. 岩手県立博物館, 盛岡.

岩手県（2024）岩手県レッドリスト2024. <https://>

www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html（参照2025年2月19日）

環境省（2020）環境省レッドリスト2020. <https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf>（参照2025年2月19日）

日本鳥学会（2024）日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

植田睦之・植村慎吾（2021）全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年. 鳥類繁殖分布調査会, 府中.

表3. ルートセンサスで確認された鳥類.

		調査日			
		2020/6/17	2021/5/25	2021/6/17	2021/7/17
カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	2	1		
キジ	<i>Phasianus versicolor</i>		1		
ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus</i>	○			
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	○	2	2	2
ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i>		1		
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	○	3	3	
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	○	2	2	4
クイナ	<i>Rallus indicus</i>	2	1	1	2
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	1	2	1	2
トビ	<i>Milvus migrans</i>	○			
ノスリ	<i>Buteo japonicus</i>	○			
コゲラ	<i>Yungipicus kizuki</i>		2		
オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>		3	1	
アオゲラ	<i>Picus awokera</i>		1		
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	2	5	1	2
カケス	<i>Garrulus glandarius</i>		1		1
ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>		4	1	
ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	○		2	2
ヒガラ	<i>Periparus ater</i>			1	
ヤマガラ	<i>Sittiparus varius</i>		1		
シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>	○	5	2	3
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	3	8	7
ウグイス	<i>Horornis diphone</i>		6	5	5
ヤブサメ	<i>Urosphena squameiceps</i>				1
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>			1	12
オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>		2		
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	1	1	4	
メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>		3		3
コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	○			
クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>		3	1	
コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>		1	1	
キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	○	4	2	1
ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>		2		1
イカル	<i>Eophona personata</i>	2	2		9
カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>				1
アオジ	<i>Emberiza personata</i>	○	6	6	9
種数		18	27	19	18



写真57. 2020年6月に湿原西側に設置したICレコーダー。



写真58. 2020年6月に湿原東部に設置したICレコーダー。



写真59. 2021年5月に湿原西部に設置したICレコーダー。



写真60. 2021年5月に湿原東部中側に設置したICレコーダー。



写真61. 2021年5月に湿原東部東側に設置したICレコーダー。



写真62. カルガモ (2021年5月6日撮影).



写真63. ジシギ類 (2021年8月9日撮影).



写真64. アオサギ (2021年8月13日撮影).

6. 春子谷地の中型・大型哺乳類

鈴木 まほろ・高橋 雅雄

調査方法

赤外線センサーカメラを2021年5月1日から10月22日まで湿原内に最大7台設置した(図4)。センサーカメラはLtl-Acorn6210 PLUSを用い、撮影設定はMode: Camera(静止画); Photo size: 5MP; Interval: 1 min; Sense Level: Normal; Side PIR: ONとした。4台は樹木の幹に少し下向きに縛り付け、高さは100-130 cm程度とした(写真65)。残り3台のうち、2台は湿原西部の木杭に高さ80 cm程度で縛り付け(写真66)、もう1台は中央部の沼地の縁に木杭で設置し、高さは20 cm程度になるように調整した(写真67)。2-3ヶ月ごとに状態をチェックし、必要に応じて電池交換や撮影データ回収を行った。

同年10月25日からは位置を変更し3台を2022年12月21日まで継続して設置した(図5)。また2023年にも位置を変更し4月10日から12月13日まで設置した(図6)。センサーカメラはNeewer社製およびCampark社製T100を用いた。撮影設定は2022年にはMode: 静止画連続3枚; Photo size: 5MP; Interval: 30 sec.; Sense Level: Normal; Side PIR: ONとした。2023年には静止画連続3枚+動画20秒の撮影とし、他の設定は同様とした。設置には樹木の幹や三脚を用い、高さは80 cmから130 cmとした(写真68)。

得られた撮影データは内容を確認し、哺乳類が写っていたもののみを選別して、種を可能な限り同定し、撮影個体数を集計した。10分以内に繰り返し撮影された同種・同サイズの個体は同一個体とみなし、重複は数えないものとした。なお、分類と学名は川田ほか(2021)に拠った。

調査結果

計9種が撮影された(表4)。特に多かったのはニホン

ジカ *Cervus nippon* で、3年の合計でオス26頭とメス157頭が確認され、最多で5頭が同時に撮影された(写真73)。オスは春と秋のみだったが(写真69-71)、メスは4月から11月まで頻繁に撮影され(写真72-74)、特に夏に多かった。子連れのメスも毎年撮影された(写真75-77)。

次に多かったのはツキノワグマ *Ursus thibetanus* とニホンノウサギ *Lepus brachyurus* で40頭ずつ撮影された。ツキノワグマは特に7月に多く(写真84-86)、体の小さい若い個体や、2頭の子を連れたメスも確認された(写真85)。ニホンノウサギは4月~5月に多かった(写真94-95)。アカギツネ *Vulpes vulpes* は33頭撮影され、特に早春と冬に多かった(写真87-89)。イノシシ *Sus scrofa* は25頭が撮影され(写真81-83)、初夏に多かったが秋にも確認された。体が非常に大きい単独個体(写真81)や子連れ(写真82)も撮影された。他に、ニホンカモシカ *Capricornis crispus* (写真78-80)、タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (写真90-91)、ニホンイタチ *Mustela itatsi* (写真92)、ニホンテン *Martes melampus* (写真93) が撮影された。

考察

春子谷地は夏から秋にかけて草丈が高くなるため、中型種(ニホンノウサギ・アカギツネ・タヌキ・ニホンイタチ・ニホンテン)は草の中に隠れてしまい、センサーカメラで撮影することが難しくなる。これらの種が春に多く撮影され、夏から秋にかけては撮影頻度が低くなるのはそのため、この期間の撮影枚数は彼らの生息数や利用頻度を反映したものではないと考えられる。

一方、大型種(ニホンジカ・ニホンカモシカ・イノシシ・ツキノワグマ)は、夏から秋にかけても頻繁に撮影されて

おり、特にニホンジカは頭数が多かった。湿原中央の池の周囲に設置したカメラでは同一個体が続けて撮影され、滞在して草を食べたり、水を飲んだりしていることが確認された(写真67)。また、ニホンジカ・イノシシ・ツキノワグマの3種は子連れが撮影され、当地で繁殖活動をしていることが確かめられた。

近年、湿原内部では草食動物によると思われる掘り返し跡が増加しており(写真96-97)、またニホンジカが好むアザミ類では頻繁に食痕が見つまっている(写真98)。岩手山麓のニホンジカの密度が高くなると、湿原の植生に与える影響も急激に増大することが予想され、特に個体数の少ない希少な植物に対しては甚大な影響を及ぼす恐れがある。

またイノシシも湿原中央の池の周囲で多く撮影されていた。岩手県内では近年、イノシシの個体数が特に奥羽山脈沿いで急激に増加しており(岩手県環境生活部自然保護課2024)、農地における農作物の被害が大きくなっている。イノシシは地面を掘り返し植物の根や昆虫などを食べるので、湿原への侵入が多くなると、やはり湿原植生に与える影響は大きくなると予想される。

引用文献

岩手県環境生活部自然保護課(2024)令和6年度イノシシ管理検討協議会資料. https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/077/070/r6shiryuu.pdf (参照2025年2月28日)

川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽創・姉崎智子・鈴木聡・押田龍夫・横畑泰志(2021)世界哺乳類標準和名リスト2021年度版. <https://www.mammalogy.jp/list/index.html> (参照2025年2月28日)

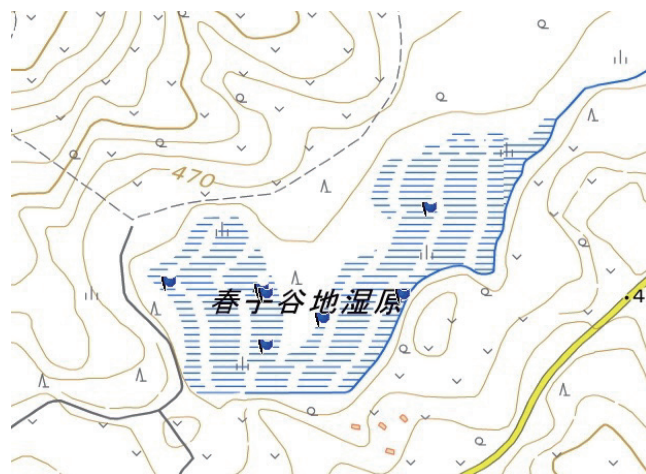


図4. 2021年5月のセンサーカメラの設置位置.



図5. 2021年10月のセンサーカメラの設置位置.

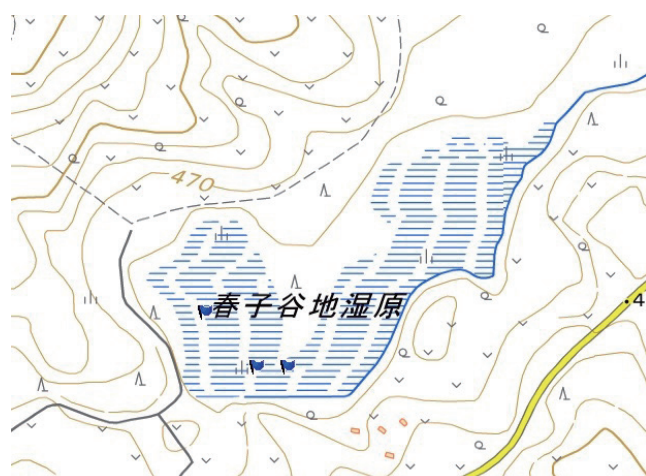


図6. 2023年4月のセンサーカメラの設置位置.

表4. 2021年5月～2023年12月に春子谷地で撮影された哺乳類の月別頭数.

年	月	カメラ 台数	ニホンジカ				ニホン カモシカ	イノシシ	ツキノワ グマ	アカ ギツネ	タヌキ	ニホン イタチ	ニホン テン	ニホン ノウサギ
			雄	雌	不明	子								
2021	5	5台	5	1	1	0	0	0	11	12	1	0	6	
	6	7台	1	4	0	0	0	4	1	0	1	0	2	
	7	7台	0	12	0	3	1	0	11	0	0	0	1	
	8	5台	0	13	0	1	1	2	3	1	0	0	0	
	9	5台	3	7	0	0	0	0	3	0	0	0	0	
	10	3台	3	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0	
	11	3台	1	8	0	0	1	0	1	3	0	0	0	
	12	3台	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	
2022	4	3台	0	10	0	0	0	3	1	1	0	0	2	
	5	3台	2	15	1	0	0	4	0	0	0	0	13	
	6	3台	0	8	0	1	0	7	1	0	0	0	2	
	7	3台	0	7	2	1	0	1	6	0	0	0	0	
	8	3台	0	15	0	1	0	0	2	0	0	0	0	
	9	3台	0	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	
	10	3台	2	2	0	0	0	2	1	0	0	0	0	
	11	3台	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
12	3台	1	0	0	0	0	0	0	10	0	0	1		
2023	4	3台	2	6	0	0	2	0	2	0	4	0	9	
	5	3台	1	5	0	0	1	0	1	0	2	0	1	
	6	3台	0	12	0	0	0	0	1	1	3	0	3	
	7	3台	0	19	0	1	1	1	6	1	0	0	0	
	8	3台	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	
	9	3台	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	
	10	3台	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	11	3台	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
12	3台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
合計			26	157	5	9	9	25	40	33	23	2	1	40



写真65. 2021年5月に設置したセンサーカメラ.



写真66. 2021年5月に設置したセンサーカメラ.



写真67. 2021年5月に設置したセンサーカメラ.



写真68. 2023年4月に設置したセンサーカメラ.



写真69. ニホンジカの雄
(2021年5月3日撮影).



写真70. ニホンジカの雄
(2021年5月24日撮影).



写真71. ニホンジカの雄
(2021年10月8日撮影).



写真72. ニホンジカの雌
(2021年6月23日撮影).



写真73. ニホンジカの雌の群れ
(2022年4月25日撮影).



写真74. ニホンジカの雌
(2023年6月29日撮影).



写真75. ニホンジカの親子
(2021年7月5日撮影).



写真76. ニホンジカの親子
(2021年7月20日撮影).



写真77. ニホンジカの親子
(2021年11月8日撮影).



写真78. ニホンカモシカ
(2021年11月6日撮影).



写真79. ニホンカモシカ
(2023年4月23日撮影).



写真80. ニホンカモシカ
(2023年9月11日撮影).



写真81. イノシシ (2021年6月14日撮影).



写真82. イノシシの親子
(2021年8月1日撮影).



写真83. イノシシ (2022年6月20日撮影).



写真84. ツキノワグマ (2021年7月9日撮影).



写真85. ツキノワグマの親子
(2021年9月29日撮影).



写真86. ツキノワグマ (2023年4月25日撮影).



写真87. アカギツネ (2021年5月17日撮影).



写真88. アカギツネ (2021年11月29日撮影).



写真89. アカギツネ (2022年2月2日撮影).



写真90. タヌキ (2021年5月20日撮影).



写真91. タヌキ (2023年5月19日撮影).



写真92. ニホンイタチ (2021年5月26日撮影).



写真93. ニホンテン (2023年12月5日撮影).



写真94. ニホンノウサギ (2021年5月3日撮影).



写真95. ニホンノウサギ (2023年6月24日撮影).



写真96. 湿地の踏み荒らし跡
(2020年10月21日撮影).



写真97. 地面を掘り返した跡
(2022年8月24日撮影).



写真98. キセルアザミの食痕
(2022年8月29日撮影).

7. 春子谷地の保全上の課題と提言

鈴木 まほろ

1) 流入水の富栄養化とハンノキ林の拡大

「2. 春子谷地の植物相の変化」で述べたように、春子谷地の東部では、ハンノキ林の急速な拡大が近年に起きており、湿性草原の面積が減少している。過去の調査で特に個体数の少なかった絶滅危惧種のうち、林縁に生育する種のいくつかは今回の調査では確認することができず、植生変化によって消失したと考えられる。

ハンノキ林の拡大は、周辺牧草地からの土砂の流入と、その後の流入水の富栄養化によって促進されていることが示唆されている（滝沢村・日本技術開発株式会社 2000, 鈴木 2008）。今回の調査では、これまで春子谷地の中央部では見られなかった富栄養の湿地を好む植物が、拡大したハンノキ林の中で増加していることが分かり、その示唆を裏付ける結果となった。

春子谷地は最終氷期の終わり頃、約13,000年前から湿原であったことが分かっている（吉田・吉木 2008）。その生物相には氷期遺存種を多く含み、非常に希少である。維管束植物では、春子谷地が本州唯一の生育地であるシロミノハリイ *Eleocharis margaritacea*、春子谷地が岩手県唯一の生育地として知られるヒメタヌキモ *Utricularia minor*、ホソバノシバナ *Triglochin palustris*、ホロムイクグ *Carex oligosperma* subsp. *tsuishikarensis* などが、保全すべき種の筆頭である。

流入水の富栄養化とそれに伴うハンノキ林の拡大は、これらの植物の存続を脅かすものであり、原因の究明と対策が求められる。

2) 特定外来種の接近

近年、春子谷地の南東部に隣接する牧草地と別荘地、

および植林地において、特定外来種のオオハンゴンソウ *Rudbeckia laciniata* とアレチウリ *Sicyos angulatus* が繁茂している。両種は特に川岸など富栄養の湿った土地において大きな群落を作る植物である（清水ほか 2001）。

対策として、一部ではボランティアによるオオハンゴンソウの抜き取り作業が行われているが、個体数減少には至っていない。現在のところはまだ湿原への侵入は発生していないが、富栄養化が進行した場合には、これらが湿原内に定着し、湿原の生態系に大きな影響を与える可能性が高く、早期に除去することが望まれる。

3) ニホンジカおよびイノシシの侵入・食害

「6. 春子谷地の中型・大型哺乳類」で述べたように、今回の調査によって、春子谷地には多くのニホンジカ *Cervus nippon* が侵入していることが判明した。また、イノシシ *Sus scrofa* の侵入が度々起きていることも確認された。さらに、絶滅危惧II類のキセルアザミ *Cirsium sieboldii* をはじめとする湿原の草本には、草食動物による食痕が増え、また地面の掘り返し跡も増えていた。

ニホンジカやイノシシの密度が高い湿原では、植物の採食に加えて地面の踏みつけや掘り起こしによって急速に植生が変化し、衰退することが知られている（大橋 2017, 安藤ほか 2014）。影響は植物にとどまらず、それに依存する昆虫類など、生態系全体に波及する。これらの影響を防ぐため、湿原の周囲に侵入防止柵を設けるなどの対策が早急に必要である。

引用文献

安藤正規・押山友美・小澤一輝（2014）岐阜県山中峠湿原

における野生哺乳類によるミズバショウ群落の攪乱. 日本緑化工学会誌39: 381-388.

大橋春香 (2017) 第2章 自然植生への影響. 梶光一・飯島
勇人 (編) 日本のシカ. pp. 28-45. 東京大学出版会, 東京.

清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 (編著) (2001) 日本帰化
植物写真図鑑. 全国農村教育協会, 東京.

鈴木まほろ (2008) 春子谷地の過去と現在. 春子谷地生
物相調査グループ (編) 春子谷地生物相調査報告書. pp.
55-58. 春子谷地生物相調査グループ, 盛岡.

滝沢村・日本技術開発株式会社 (2000) 春子谷地湿原保全
基礎調査 調査報告書. 滝沢村, 滝沢.

吉田明弘・吉木岳哉 (2008) 岩手山南東麓春子谷地湿原の
花粉分析からみた約13,000年前以降の植生変遷と気候変
化. 地理学評論81: 228-237.

8. 高松公園芝水園の概要と調査の目的

高橋 雅雄

高松公園は盛岡市高松（北緯39°43'28”，東経141°08'48”）にある45.6 haの市立公園である（盛岡市 online）。江戸時代前期の1660年代に造成された上田堤の3段の池（上堤・中堤・下堤）の中堤から続く高松の池、上堤の一部から続く芝水園と、周囲の雑木林や植樹されたサクラ類などの林地から成る。また、隣接する旧盛岡競馬場跡地も2014年にエコアス広場（盛岡市環境学習広場）と高松多目的広場として整備され、一体的な公園として機能している。その中で、1955年に釣り堀として開業し2020年に閉鎖された芝水園には、県内でも数少ないまとまった湿性草原（ヨシ原：1.3 ha）があり、特に湿性草原棲鳥類の繁殖地・生息地として機能している。

しかしながら、その湿性草原環境は複数の要因により危機的状況にある。第1に、湿性草原の中央部にウキヤガラ*Bolboschoenus fluviatilis*の単純群落が拡大し、ヨシ*Phragmites australis*やガマ*Typha latifolia*が衰退して周辺部へ追いやられている（写真99）。第2に、周辺部で乾燥化と陸地化が進行し、樹木が侵入して湿性草原内にヤナギ類の数本の太木が育ち（写真99-100）、外周には疎林が発達している。また、侵略的外来種の大型草本（特にオオハンゴンソウ*Rudbeckia laciniata*とオオアワダチソウ*Solidago gigantea*）も侵入して群落が周辺部に拡大している（写真100）。これらの湿性草原の変質と劣化により、湿性草原棲鳥類の減少、特に繁殖していたヨシゴイ*Ixobrychus sinensis*は2017年、コヨシキリ*Acrocephalus bistrigiceps*は2018年を最後に飛来が途絶えて、湿性草原棲鳥類の生息地としての価値が危惧されている。

当地の湿性草原環境および生息する野生生物を将来にわたって保全するためには、その生態系全体について情報を

収集し、問題を科学的に評価して適切に管理する必要がある。高松公園に生息・生育する生物相については、1980年に盛岡市が岩手大学へ委託した高松池環境調査の結果報告（盛岡市・岩手大学 1982）、2006年に高松公園と親しむ会・高松公園自然環境調査委員会が発行した高松公園自然環境調査報告書（高松公園自然環境調査委員会 2006）があり、鳥類については日本野鳥の会もりおかが月1回実施する探鳥会での確認鳥類のデータがある。しかしながら、芝水園の湿性草原環境に注目した調査例は無い。また、2014年頃までは湿性草原を1/4ずつ刈り取って茅葺屋根などの材料として搬出する管理がおこなわれていたが、近年は実施されていない。

本調査は、芝水園の動植物相、特に維管束植物相・鳥類相・哺乳類相に関わる基礎的な情報を収集し、最も一般的な湿性草原棲鳥類であるオオヨシキリ*A. orientalis*の生息状況と繁殖状況から、湿性草原環境の質を評価することを目的とした。

引用文献

- 盛岡市 (online) 高松公園 (盛岡市公式ホームページ).
<https://www.city.morioka.iwate.jp/kurashi/midori/koen/1010492.html> (参照2025年3月1日)
- 盛岡市・岩手大学 (編) (1982) 高松池現況調査報告書. 盛岡市, 盛岡.
- 高松公園自然環境調査委員会 (編) (2006) 高松公園自然環境調査報告書. 高松公園と親しむ会・高松公園自然環境調査委員会, 盛岡



写真99. 2022年5月5日の芝水園の湿性草原環境の様子.



写真100. 2022年7月30日の芝水園の湿性草原環境の様子.

9. 高松公園芝水園の維管束植物相

鈴木 まほろ

調査方法

2021年～2022年の4月～10月に年2-3回、湿性草原の内部および周辺を踏査し、目視により確認した維管束植物の種名を記録した。また、現地での同定が困難な種や特に標本記録として残すべき種については各2個体を採集し、押し葉標本を作成した後、精査して種名を特定した。調査は2021年7月7日・9月6日・2022年4月20日・6月16日・8月2日に実施した。

調査結果

周囲の土手を除く湿地部分で維管束植物87種が確認された(表5; 写真101-118)。いずれも岩手県内の低湿地に見られる種であった。岩手県レッドリスト2024(岩手県2024)に掲載されている種として、ザゼンソウ *Symplocarpus renifolius* (留意; 写真103) とノダイオウ *Rumex longifolius* (留意) が記録された。中央のウキヤガラ(写真106)の単純群落で特に種多様性が低く、周縁部で種数が多かった。また、主に周縁部に特定外来種であるオオハンゴンソウ *Rudbeckia laciniata* (写真116) や生態系被害防止外来種であるキシヨウブ *Iris pseudacorus* ・イタチハギ *Amorpha fruticosa* ・ニセアカシア *Robinia pseudoacacia* ・エゾノギシギシ *Rumex obtusifolius* ・オオブタクサ *Ambrosia trifida* (写真115) ・アメリカセンダングサ *Bidens frondosa* ・ヒメジョオン *Erigeron annuus* ・オオアワダチソウ *Solidago gigantea* (写真117) を含む侵略的外来植物が密生する場所があり、他の生物や湿地生態系への影響があるものと推察された。

引用文献

岩手県(2024) 岩手県レッドリスト2024. <https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html> (参照2025年2月19日)

表5. 芝水園で確認された維管束植物. ※外:外来種, 特外:特定外来種, 生外:生態系被害防止外来種, 逸出:栽培からの逸出, IRL:岩手県レッドリスト2024掲載種.

門名	科名	和名	学名	備考	
シダ植物	トクサ科	スギナ	<i>Equisetum arvense</i>		
	コウヤワラビ科	コウヤワラビ	<i>Onoclea sensibilis</i> var. <i>interrupta</i>		
	ヒメシダ科	ヒメシダ	<i>Thelypteris palustris</i>		
被子植物	ドクダミ科	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i>		
	サトイモ科	ミズバショウ	<i>Lysichiton camtschatcensis</i>		
		ザゼンソウ	<i>Symplocarpus renifolius</i>	IRL:留意	
	ヒルムシロ科	ヒルムシロ属の一種	<i>Potamogeton</i> sp.		
	アヤメ科	キシヨウブ	<i>Iris pseudacorus</i>	生外	
	ワスレグサ科	ゼンテイカ	<i>Hemerocallis middendorffii</i> var. <i>esculenta</i>		
	ヒガンバナ科	ラッパズイセン	<i>Narcissus pseudonarcissus</i>	外	
	クサスギカズラ科	コバギボウシ	<i>Hosta sieboldii</i> var. <i>sieboldii</i> f. <i>spathulata</i>		
	ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i>		
	ガマ科	ガマ	<i>Typha latifolia</i>		
	イグサ科	コウガイゼキショウ	<i>Juncus prismatocarpus</i> subsp. <i>leschenaultii</i>		
	カヤツリグサ科	ウキヤガラ	<i>Bolboschoenus fluviatilis</i> subsp. <i>yagara</i>		
		オニスゲ	<i>Carex dickinsii</i>		
		カサスゲ	<i>Carex dispalata</i>		
		ヒメクグ	<i>Cyperus brevifolius</i> var. <i>leiolepis</i>		
		アゼガヤツリ	<i>Cyperus flavidus</i>		
		コアゼガヤツリ	<i>Cyperus haspan</i> var. <i>tuberiferus</i>		
		カヤツリグサ	<i>Cyperus microiria</i>		
		イネ科	クサヨシ	<i>Phalaris arundinacea</i>	外
			ヨシ	<i>Phragmites australis</i>	
		アケビ科	アケビ	<i>Akebia quinata</i>	
	ユキノシタ科	トリアシショウマ	<i>Astilbe odontophylla</i>		
	ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis glandulosa</i> var. <i>heterophylla</i>		
	マメ科	イタチハギ	<i>Amorpha fruticosa</i>	生外	
		ニセアカシア	<i>Robinia pseudoacacia</i>	生外	
		シロツメクサ	<i>Trifolium repens</i>	外	
		バラ科	キンミズヒキ	<i>Agrimonia pilosa</i> var. <i>japonica</i>	
		へびイチゴ	<i>Potentilla hebiichigo</i>		
		ノイバラ	<i>Rosa multiflora</i>		
		クマイチゴ	<i>Rubus crataegifolius</i>		
		ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i>		
		ナガボノワレモコウ	<i>Sanguisorba tenuifolia</i>		
		アサ科	カナムグラ	<i>Humulus scandens</i>	
クワ科		マグワ	<i>Morus alba</i>	逸出	
イラクサ科		ミズ	<i>Pilea hamaoi</i>		
		アオミズ	<i>Pilea pumila</i>		
クルミ科		オニグルミ	<i>Juglans mandshurica</i> var. <i>sachalinensis</i>		
カタバミ科	エゾタチカタバミ	<i>Oxalis stricta</i>			
スミレ科	タチツボスミレ	<i>Viola grypoceras</i> var. <i>grypoceras</i>			
	ツボスミレ	<i>Viola verecunda</i> var. <i>verecunda</i>			

門名	科名	和名	学名	備考		
被子植物	ヤナギ科	エゾノキヌヤナギ	<i>Salix schwerinii</i>			
	フウロソウ科	ヒメフウロ	<i>Geranium robertianum</i>	外		
	ミソハギ科	ミソハギ	<i>Lythrum anceps</i>			
	アカバナ科	アカバナ	<i>Epilobium pyrricholophum</i>			
		ミチタネツケバナ	<i>Cardamine hirsuta</i>		外	
		タネツケバナ	<i>Cardamine occulta</i>			
	タデ科	ウナギツカミ	<i>Persicaria sagittata</i> var. <i>sibirica</i>			
		ママコノシリヌグイ	<i>Persicaria senticosa</i>			
		ミゾソバ	<i>Persicaria thunbergii</i> var. <i>thunbergii</i>			
		ノダイオウ	<i>Rumex longifolius</i>		IRL:留意	
	ナデシコ科	エゾノギシギシ	<i>Rumex obtusifolius</i>		生外	
		ツメクサ	<i>Sagina japonica</i>			
		ウシハコベ	<i>Stellaria aquatica</i>			
	コハコベ	コハコベ	<i>Stellaria media</i>		外	
		ツリフネソウ科	キツリフネ	<i>Impatiens noli-tangere</i>		
			ツリフネソウ	<i>Impatiens textorii</i>		
	サクラソウ科	クサレダマ	<i>Lysimachia vulgaris</i> subsp. <i>davurica</i>			
	アカネ科	ヤエムグラ	<i>Galium spurium</i> var. <i>echinospermon</i>			
		ホソバノヨツバムグラ	<i>Galium trifidum</i> subsp. <i>columbianum</i>			
	アカネ	アカネ	<i>Rubia argyi</i>			
		キョウチクトウ科	ガガイモ	<i>Metaplexis japonica</i>		
	モクセイ科	イボタノキ	<i>Ligustrum obtusifolium</i>			
		ミヤマイボタ	<i>Ligustrum tschonoskii</i>			
	オオバコ科	オオイヌノフグリ	<i>Veronica persica</i>		外	
	シソ科	ヒメオドリコソウ	<i>Lamium purpureum</i>		外	
		シロネ	<i>Lycopus lucidus</i>			
	マルバハッカ	マルバハッカ	<i>Mentha suaveolens</i>		外	
		シソ	<i>Perilla frutescens</i> var. <i>crispa</i>		逸出	
		キク科	オオブタクサ	<i>Ambrosia trifida</i>		生外
			アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i>		生外
	ヒメジョオン	ヒメジョオン	<i>Erigeron annuus</i>		生外	
		オオハンゴンソウ	<i>Rudbeckia laciniata</i>		特外	
		オオアワダチソウ	<i>Solidago gigantea</i> subsp. <i>serotina</i>		生外	
オニノゲシ		<i>Sonchus asper</i>		外		
オニタビラコ		<i>Youngia japonica</i>				
ガマズミ科		ニワトコ	<i>Sambucus racemosa</i> subsp. <i>sieboldiana</i>			
	ガマズミ	<i>Viburnum dilatatum</i>				
スイカズラ科	スイカズラ	<i>Lonicera japonica</i>				
セリ科	シャク	<i>Anthriscus sylvestris</i> subsp. <i>sylvestris</i>				
	ミツバ	<i>Cryptotaenia canadensis</i> subsp. <i>japonica</i>				
	セリ	<i>Oenanthe javanica</i>				
	ウマノミツバ	<i>Sanicula chinensis</i>				
	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i>				



写真101. コウヤワラビ (2021年9月6日撮影).



写真102. ミズバショウ (2022年4月20日撮影).



写真103. ザゼンソウ (2022年4月20日撮影).



写真104. ラッパズイセン (2022年4月20日撮影).



写真105. ガマ (2021年9月6日撮影).



写真106. ウキヤガラ (2022年8月2日撮影).



写真107. カツリグサ (2021年9月6日撮影).



写真108. ノイバラ (2022年6月16日撮影).



写真109. ミソハギ (2022年8月2日撮影).



写真110. キツリフネ (2021年9月6日撮影).



写真111. ツリフネソウ (2021年9月6日撮影).



写真112. クサレダマ (2021年7月7日撮影).



写真113. オオイヌノフグリ (2022年4月20日撮影).



写真114. シロネ (2022年8月2日撮影).



写真115. オオブタクサ (2021年9月6日撮影).



写真116. オオハンゴンソウ (2022年8月2日撮影).



写真117. オオアワダチソウ (2022年8月2日撮影).



写真118. スイカズラ (2022年6月16日撮影).

10. 高松公園芝水園で確認された昆虫類

渡辺 修二

調査方法

2021年と2022年の6月～10月に各月数回、および2023年の5月に湿地内部と周辺を踏査し、特徴的な昆虫類を採集した。また、2021年6月にピットフォールトラップ（プラスチック製のコップを地中に埋め、24時間後に回収して落下した昆虫類を得る）による採集を行った。

調査は2021年6月25日・26日・7月7日・30日・31日・8月27日・28日・9月28日・29日・10月27日・28日・2022年6月27日・28日・8月23日・24日・9月27日・28日・10月25日・26日・2023年5月1日に実施した。

調査結果

2021年7月30日にモノサシトンボ *Coperia annulata* が確認された（写真119）。本種は周辺に樹林のある池沼に生息する（尾園ほか 2017）。

同じく2021年7月30日にセスジアシナガサシガメ *Gardena brevicollis* が採集された（写真120）。岩手県初記録である。草の根際で見られる（石川ほか 2012）。また、2023年5月1日にオオクロカメムシ *Scotinophara horvathi* が採集された（写真121）。採集時は全体が泥に覆われていた。本種は岩手県での採集記録は少ない。ヨシの汁を吸い、根際や地表の枯葉の下などで見られる（平嶋・森本 2008）。

2021年7月30日にホソハンミョウ *Cylindera gracilis* が採集された（写真122）。本種は環境省レッドリスト2020（環境省 2020）と岩手県レッドリスト2024（岩手県 2024）の両方で絶滅危惧II類に分類されている。本種は林縁や林間の、裸地が混在する草地に生息する（岩手県環境生活部自然保護課 2014）。また、2021年6月25日～26日に実施した

ピットフォールトラップでコハンミョウモドキ *Elaphrus punctatus* が採集された（写真123）。本種は環境省レッドリスト 2020で絶滅危惧IB類に分類されている（環境省 2020）。岩手県ではほとんど採集記録がないため、岩手県レッドリスト2024には掲載されていない。本種は河原などに生息する（森本 2007）。2023年5月1日にオオルリハムシ *Chrysolina virgata* が採集された（写真124）。本種は環境省レッドリスト2020では準絶滅危惧に分類され、岩手県レッドリスト2024では留意とされている（環境省 2020, 岩手県 2024）。自然度の高い湿地に生息し、シロネなどを食草としている（岩手県環境生活部自然保護課 2014）。

引用文献

- 平嶋義宏・森本桂（監）（2008）新訂原色昆虫大圖鑑 第三卷. 北隆館, 東京.
- 石川忠・高井幹夫・安永智秀（編）（2012）日本原色カメムシ図鑑 第3巻. 全国農村教育協会, 東京.
- 岩手県（2024）岩手県レッドリスト2024. <https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html>（参照2025年2月18日）.
- 岩手県環境生活部自然保護課（編）（2014）いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物（2014年版）. 岩手県環境生活部自然保護課, 盛岡.
- 環境省（2020）環境省レッドリスト2020. <https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf>（参照2025年2月18日）.
- 森本桂（監）（2007）新訂原色昆虫大圖鑑 第二巻. 北隆館, 東京.
- 尾園暁・川島逸郎・二橋亮（2017）ネイチャーガイド 日本のトンボ. 文一総合出版, 東京.



写真119. モノサシトンボ (2021年7月30日撮影).



写真120. セスジアシナガサシガメ (2021年7月30日撮影).



写真121. オオクロカメムシ (2023年5月1日採集).



写真122. ホソハンミョウ (2021年7月30日採集).



写真123. コハンミョウモドキ (2021年6月26日採集).



写真124. オオルリハムシ (2023年5月1日撮影).

11. 高松公園芝水園の鳥類

高橋 雅雄

熊谷 淳一（日本野鳥の会もりおか）

調査方法

1) 鳥類相調査：水面や湿性草原を含めた芝水園を1周するルートセンサスを、2021年4月～2023年3月に毎月1回早朝に実施した。目視と音声の聞き取りにて種を確認し、全ての出現鳥類を地図上に記録した。分類と学名は日本鳥学会（2024）に拠った。

2) カメラトラップ調査：赤外線センサーカメラを2020年11月に2台、2021年3月から3台設置し（図7）、2022年11月まで断続的に撮影した。センサーカメラはLtl-Acorn6210を用い、撮影設定はMode: Camera（静止画）；Photo size: 5MP; Interval: 1 min; Sense Level: Normal; Side PIR: ONとした。地面におおよそ200×50 cmの開放面を設け、2022年5月からは85×27 cmの板を敷いてペグで固定した。その短辺に隣接するようセンサーカメラを木杭で設置し（写真125）、撮影レンズの高さが20 cm程度に、開放面または板の全域が撮影範囲に収まるように調整した。3ヶ月～半年ごとに状態をチェックし必要に応じて電池交換・撮影データ回収・撮影範囲に掛かる草の除去・板の調整を行った。得られた撮影データは内容を確認し脊椎動物が写っていたもののみを選別して、種を可能な限り同定して撮影された鳥類を集計した。

3) オオヨシキリの繁殖状況調査：2021年～2024年の5月～6月に、芝水園の湿性草原で縄張りを持つオオヨシキリ *Acrocephalus orientalis* の雄成鳥を可能な限り捕獲標識した（捕獲等の許可は環境省より取得した）。2021年と2022年は5月中旬～8月上旬の早朝または夕方に週2回程

度の観察を実施し、各雄の囀り位置を記録して縄張り地図を作成した。各縄張りについて、雌雄の行動から営巣を発見し、可能な場合は巣の内容を確認した。2022年と2023年は5月～6月に2～3回程度の観察を実施し、各雄の囀り位置を記録して縄張り地図を作成した。

4) オオセッカと湿性草原棲クイナ類の越冬調査：先行研究（平野 2006, 平野 2010, 渡辺・平野 2011, 高橋ほか 2016, 2017, 2018）を参考に、オオセッカ *Locustella pryeri* と湿性草原棲クイナ類（クイナ *Rallus indicus*・ヒクイナ *Zapornia fusca*・シマクイナ *Coturnicops noveboracensis*）を対象に、夕方のプレイバック調査を2021年12月27日・2022年2月13日・12月11日に実施した。日没の30分前から芝水園の湿性草原の外周をゆっくりと歩き、おおよそ50-100 mごとに、繁殖期の囀り声・地鳴き声・警戒声を再生機（BLAVOR Bluetooth Speaker model B01）を用いて再生した（再生声は弱風条件下で100 m先で聞こえることを事前に確かめた）。そして直後の反応の有無を確認し、発声を得られた際には地図上にそれぞれの位置を記録した。ダブルカウントを防ぐために、同じ地点から複数の声が続けて聞こえた場合は同一個体とみなし、プレイバックへの反応が徐々に移動した場合も同一個体とみなした。またプレイバック時以外で声を確認した際は、発声地点から未記録個体と判断できた場合のみ地図上に位置を記録した。再生した音声は、オオセッカの囀り（ビジョビジョビジョ）1回と地鳴き（ギチチ）4回、クイナの声（クイークイー）1回、ヒクイナの警戒声（クルル）2回、シマクイナの囀り声（クルクルガー）1回と

警戒声（キュルル）2回の順とした。

調査結果

1) 鳥類相調査：ルートセンサスによって計47種が確認された（表6）。そのうち湿性草原棲の種はバン *Gallinula chloropus* とオオヨシキリで、バンは4月～10月に、オオヨシキリは5月～8月に観察された。環境省レッドリスト2020（環境省 2020）および岩手県レッドリスト2024（岩手県 2024）に掲載されているものは、ノビタキ *Saxicola stejnegeri*（岩手県：準絶滅危惧）・カッコウ *Cuculus canorus*（岩手県：留意）・バン（岩手県：留意）・カイツブリ *Tachybaptus ruficollis*（岩手県：留意）・カワセミ *Alcedo atthis*（岩手県：留意）の5種だった。

2) カメラトラップ調査：計11種が撮影された（表7；写真126-140）。そのうち湿性草原棲鳥類はクイナ（写真127-128）・タシギ *Gallinago gallinago*（写真129）・オオヨシキリ（写真132-134）・オオジュリン *Emberiza schoeniclus*（写真139-140）の4種で、特にクイナは冬に、オオヨシキリは春夏に著しく多かった。なお、クイナは2020年冬と2021年秋（10月13日以降）・2021年冬・2022年秋（10月5日以降）に撮影され、春夏は撮影されなかった。よって、芝水園での滞在時期は10月中旬～冬と推察された。環境省レッドリスト2020（環境省 2020）および岩手県レッドリスト2024（岩手県 2024）に掲載されているものは、ノゴマ *Calliope calliope*（岩手県：絶滅危惧Ⅱ類；写真136）・クイナ（岩手県：準絶滅危惧）・ノビタキ（岩手県：準絶滅危惧；写真137）・オオジュリン（岩手県：留意）の4種だった。

3) オオヨシキリの繁殖状況調査：2021年は6月2日に雄成鳥4個体（写真141）、6月29日に雄成鳥1個体（写真142）を捕獲標識した。6月上旬～8月上旬に週2回程度の観察を計12回行い、上記の標識雄5個体を含む雄成鳥8個体について縄張り地図を作成し、縄張り内の雌雄の造巢行動と給餌行動から巣の位置を12ヶ所特定した（図8左

上）。そのうちTM04の南側1巣とnmBの南側1巣を除いた10巣で繁殖成功したと推察した。なお、nmBの北側1巣はヨシに架けられ、4卵を確認した（写真143）。

2022年は6月2日に雄成鳥2個体（写真144）を捕獲標識した。5月中旬～7月下旬に週2回程度の観察を計15回行い、2021年標識雄4個体と上記標識雄2個体を含む雄成鳥11個体について縄張り地図を作成し、縄張り内の雌雄の造巢行動と給餌行動から巣の位置を10ヶ所特定した（図8右上）。そのうち7巣で繁殖成功したと推察した。なお、TM03の1巣について5卵を、TM07の1巣について5卵を、nmEの1巣について4卵を、nmFの1巣について1卵を確認した（写真145）。なお、TM07の1巣はオオアワダチソウに、それ以外はヨシに架けられていた。

2023年は5月17日・18日・6月3日に観察を行い、5月18日に雄成鳥1個体（写真146）を捕獲標識した。2021年標識雄3個体・2022年標識雄2個体と上記標識雄1個体を含む雄成鳥8個体について縄張り地図を作成した（図8左下）。

2024年は5月21日と24日に観察を行い、24日に雄成鳥2個体（写真147）を捕獲標識した。2021年標識雄2個体・2023年標識雄1個体と上記標識雄2個体を含む雄成鳥8個体について縄張り地図を作成した（図8右下）。

標識雄の翌年の帰還率は、2022年：5/5個体（その年に確認できた前年の標識個体/前年の標識個体；ただし1個体は未定着）、2023年：5/6個体、2024年：3/6個体で、比較的高かった。

4) オオセッカと湿性草原棲クイナ類の越冬調査：2022年12月11日にクイナ1個体を確認した。2021年12月27日と2022年2月13日は確認されなかった。

考察

本研究において、ルートセンサスで47種、カメラトラップ調査のみで4種（タシギ・ノゴマ・アオジ *E. personata*・オオジュリン）、カメラトラップ調査と越冬調

査（音声プレイバック）で1種（クイナ）の、計52種が確認された。湿性草原棲鳥類は5種（タシギ・クイナ・バン・オオヨシキリ・オオジュリン）で、そのうち3種（タシギ・クイナ・オオジュリン）はカメラトラップまたは音声プレイバックで確認された。すなわち、湿性草原棲鳥類の生息確認は一般的なルートセンサスだけでは不十分で、カメラトラップや音声プレイバックも併用する必要があると考えられた。

湿性草原棲鳥類5種のうち、バンとオオヨシキリは繁殖期に、タシギとオオジュリンは春秋の渡り期に、クイナは秋の渡り期～越冬期に確認された。そのうちオオヨシキリは縄張り雄8-11個体が毎年確認され、縄張り雄あたり1巣程度が作られ、その大部分で営巣成功していた。すなわち、芝水園の湿性草原は湿性草原棲鳥類の繁殖環境として高い質を保持していることが確かめられた。標識雄の翌年の帰還率の高さも、繁殖環境としての質の高さを示しているだろう。一方で、オオヨシキリの営巣は湿性草原周辺部のヨシ群落やオオアワダチソウ群落に限定され、中央部のウキヤガラ群落では確認されなかった。ウキヤガラ群落は採餌には利用されていたが、営巣には利用できない質の低い環境であると考えられた。

引用文献

- 平野敏明（2006）渡良瀬遊水地における繁殖期のクイナ・ヒクイナの生息状況と生息環境. Bird Research 2: A35-A46.
- 平野敏明（2010）ヒクイナ調査結果報告: 日本における2000年代後半のヒクイナの生息状況. https://www.bird-research.jp/1_katsudo/hikuina/hikuina2010.pdf.（参照2025年2月23日）
- 岩手県（2024）岩手県レッドリスト2024. <https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/rdb/1074862/index.html>（参照2025年2月19日）
- 環境省（2020）環境省レッドリスト2020. <https://www.env.go.jp/content/900515981.pdf>（参照2025年2月19日）

日本鳥学会（2024）日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

高橋雅雄・磯貝和秀・古山隆・宮彰男・蛭名純一（2016）関東地方の都市部および農村部におけるオオセツカ*Locustella pryeri*の越冬状況. Bird Research 12: A65-A71.

高橋雅雄・蛭名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉（2017）千葉県および利根川下流域におけるオオセツカ*Locustella pryeri*の越冬状況. 日本鳥類標識協会誌 29: 85-94.

高橋雅雄・蛭名純一・宮彰男・磯貝和秀・古山隆・高田哲良・堀越雅晴・大江千尋・叶内拓哉（2018）関東地方におけるシマクイナ*Coturnicops exquisitus*の冬季の生息状況. 日本鳥学会誌 67: 109-116.

渡辺美郎・平野敏明（2011）神戸市西区周辺におけるヒクイナの生息状況. Bird Research. 7: A45-A55.

表6. 2021年4月～2023年3月の芝水園の出現鳥類.

		2021年												2022年		
		4月 4/20	5月 5/26	6月 6/28	7月 7/26	8月 8/28	9月 9/23	10月 10/14	11月 11/12	12月 12/22	1月 1/17	2月 2/3	3月 3/22			
オオハクチョウ	<i>Cygnus cygnus</i>	○														
オカヨシガモ	<i>Mareca strepera</i>															
ヒドリガモ	<i>Mareca penelope</i>	○														○
カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	○	○		○					○	○	○				○
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	○		○							○	○	○			
オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	○														○
コガモ	<i>Anas crecca</i>								○							
キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>															
ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>															
キジ	<i>Phasianus versicolor</i>							○	○		○	○			○	
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>															
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>			○	○											
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>								○							
バン	<i>Gallinula chloropus</i>	○							○	○						
オオバン	<i>Fulica atra</i>										○	○				
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>		○	○					○		○	○				○
カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>		○													○
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>										○	○				
ダイサギ	<i>Ardea alba</i>											○				
トビ	<i>Milvus migrans</i>															○
カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>			○	○					○		○				
コゲラ	<i>Yungipicus kizuki</i>										○					○
アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>									○						
アオゲラ	<i>Picus awokera</i>															
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>		○	○	○				○	○	○					○
カケス	<i>Garrulus glandarius</i>														○	
シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>									○		○		○		○
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	○							○						
ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>															
ウグイス	<i>Horornis diphone</i>	○						○	○							
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>												○			○
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>		○	○	○	○	○									
ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>															○
ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>															○
コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	○	○		○	○										
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>															
ツグミ	<i>Turdus eunomus</i>															
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>															○
ノビタキ	<i>Saxicola stejnegeri</i>	○														
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	○														
セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>															
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>															○
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>											○	○			
ベニマシコ	<i>Carpodacus sibiricus</i>										○	○	○	○		
カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>												○			
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>															○
カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	○								○			○			○

表6. 続き.

		2022年							2023年					
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
		4/18	5/24	6/16	7/13	8/12	9/12	10/12	11/28	12/19	1/8	2/21	3/15	
オオハクチョウ	<i>Cygnus cygnus</i>													
オカヨシガモ	<i>Mareca strepera</i>							○					○	
ヒドリガモ	<i>Mareca penelope</i>	○												
カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	○	○			○	○	○	○				○	
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>		○	○	○		○		○				○	
オナガガモ	<i>Anas acuta</i>													
コガモ	<i>Anas crecca</i>													
キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	○	○										○	
ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>												○	
キジ	<i>Phasianus versicolor</i>		○	○			○	○	○			○	○	
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>				○		○							
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>				○									
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	○	○		○									
バン	<i>Gallinula chloropus</i>	○	○	○	○		○	○						
オオバン	<i>Fulica atra</i>	○						○						
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	○	○	○	○		○							
カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>		○										○	
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>						○							
ダイサギ	<i>Ardea alba</i>								○	○				
トビ	<i>Milvus migrans</i>													
カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>		○	○			○							
コゲラ	<i>Yungipicus kizuki</i>	○					○							
アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>			○	○									
アオゲラ	<i>Picus awokera</i>	○										○	○	
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	○	○	○	○	○	○	○	○					
カケス	<i>Garrulus glandarius</i>													
シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>	○		○		○		○	○		○	○		
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	○				○		○					
ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>			○	○									
ウグイス	<i>Horornis diphone</i>				○	○	○	○						
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○							○			○	○	
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>		○	○	○									
ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>													
ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>													
コムクドリ	<i>Agropsar philippensis</i>	○	○	○	○		○							
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>												○	
ツグミ	<i>Turdus eunomus</i>	○								○	○	○	○	
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i>													
ノビタキ	<i>Saxicola stejnegeri</i>	○												
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>										○			
セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>											○		
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>													
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	○												
ベニマシコ	<i>Carpodacus sibiricus</i>									○	○	○		
カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	○			○		○	○	○					
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>													
カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	○						○						

表7. 2020年冬～2022年秋に撮影された鳥類.

		2020年冬		2021年春夏			2021年秋		
		(11月・12月)		(3月～8月)			(9月・10月)		
		A	B	A	B	C	A	B	C
キジ	<i>Phasianus versicolor</i>	3	4		2			1	
クイナ	<i>Rallus indicus</i>	49	17				3	4	
タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>			1					
シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>								
ウグイス	<i>Horornis diphone</i>							3	
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>				39	7			
ツグミ	<i>Turdus eunomus</i>	1		6					
ノゴマ	<i>Calliope calliope</i>							1	
ノビタキ	<i>Saxicola stejnegeri</i>			1					
アオジ	<i>Emberiza personata</i>						1		
オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>			1			1	1	
不明						1			
計		53	21	9	41	8	2	3	10
撮影枚数		134	75	90	106	1437	442	46	154

		2021年冬			2022年春夏			2022年秋		
		(11月・12月)			(3月～8月)			(9月・10月・11月上旬)		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C
キジ	<i>Phasianus versicolor</i>									
クイナ	<i>Rallus indicus</i>	5	532	8				5		
タシギ	<i>Gallinago gallinago</i>									
シジュウカラ	<i>Parus cinereus</i>			1						
ウグイス	<i>Horornis diphone</i>	1				1		4		
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>				8	2	11			
ツグミ	<i>Turdus eunomus</i>									
ノゴマ	<i>Calliope calliope</i>									
ノビタキ	<i>Saxicola stejnegeri</i>									
アオジ	<i>Emberiza personata</i>			6						
オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i>									
不明										1
計		6	532	15	8	3	11	0	9	1
撮影枚数		655	798	301	98	559	621	-	288	138



図7. センサーカメラの設置位置. Google Mapより作図.
 画像©2021Google, 画像©2021CNES/Airbus, Maxar Technologies, 地図データ©2021.



写真125. センサーカメラの設置の様子.
 左上：図7のA地点；右上：B地点；下：C地点.



写真126. 2020年11月25日にB地点で撮影されたキジ.



写真127. 2020年12月9日にB地点で撮影されたクイナ.



写真128. 2021年10月13日にC地点で撮影されたクイナ.



写真129. 2021年4月28日にA地点で撮影されたタシギ.



写真130. 2021年11月2日にC地点で撮影されたシジュウカラ.



写真131. 2021年10月31日にA地点で撮影されたウグイス.



写真132. 2021年7月12日にB地点で撮影されたオオヨシキリ.



写真133. 2022年5月30日にA地点で撮影されたオオヨシキリ.



写真134. 2022年7月3日にC地点で撮影されたオオヨシキリ.



写真135. 2021年3月28日にA地点で撮影されたツグミ.



写真136. 2021年10月14日にC地点で撮影されたノゴマ.



写真137. 2021年4月20日にA地点で撮影されたノビタキ.



写真138. 2021年10月24日にA地点で撮影されたアオジ.



写真139. 2021年4月5日にA地点で撮影されたオオジュリン.



写真140. 2021年10月30日にC地点で撮影されたオオジュリン.



写真141. 2021年6月2日に捕獲標識したオオヨシキリ雄成鳥4個体（左上：TM01；右上：TM02；左下：TM03；右下：TM04）.



写真142 (左). 2021年6月29日に捕獲標識したオオヨシキリ雄成鳥1個体 (TM05).

写真143 (右). 2021年6月29日に確認したオオヨシキリ雄成鳥nmBの北側の巣.



写真144. 2022年6月2日に捕獲標識したオオヨシキリ雄成鳥2個体 (左: TM06; 右: TM07).



写真145. 2022年6月に確認したオオヨシキリの巣（左上：TM03；右上：TM07；左下：nmE；右下：nmF）.



写真146. 2023年5月18日に捕獲標識したオオヨシキリ雄成鳥1個体 (TM08).



写真147. 2024年5月24日に捕獲標識したオオヨシキリ雄成鳥2個体 (左: TM09; 右: TM10).

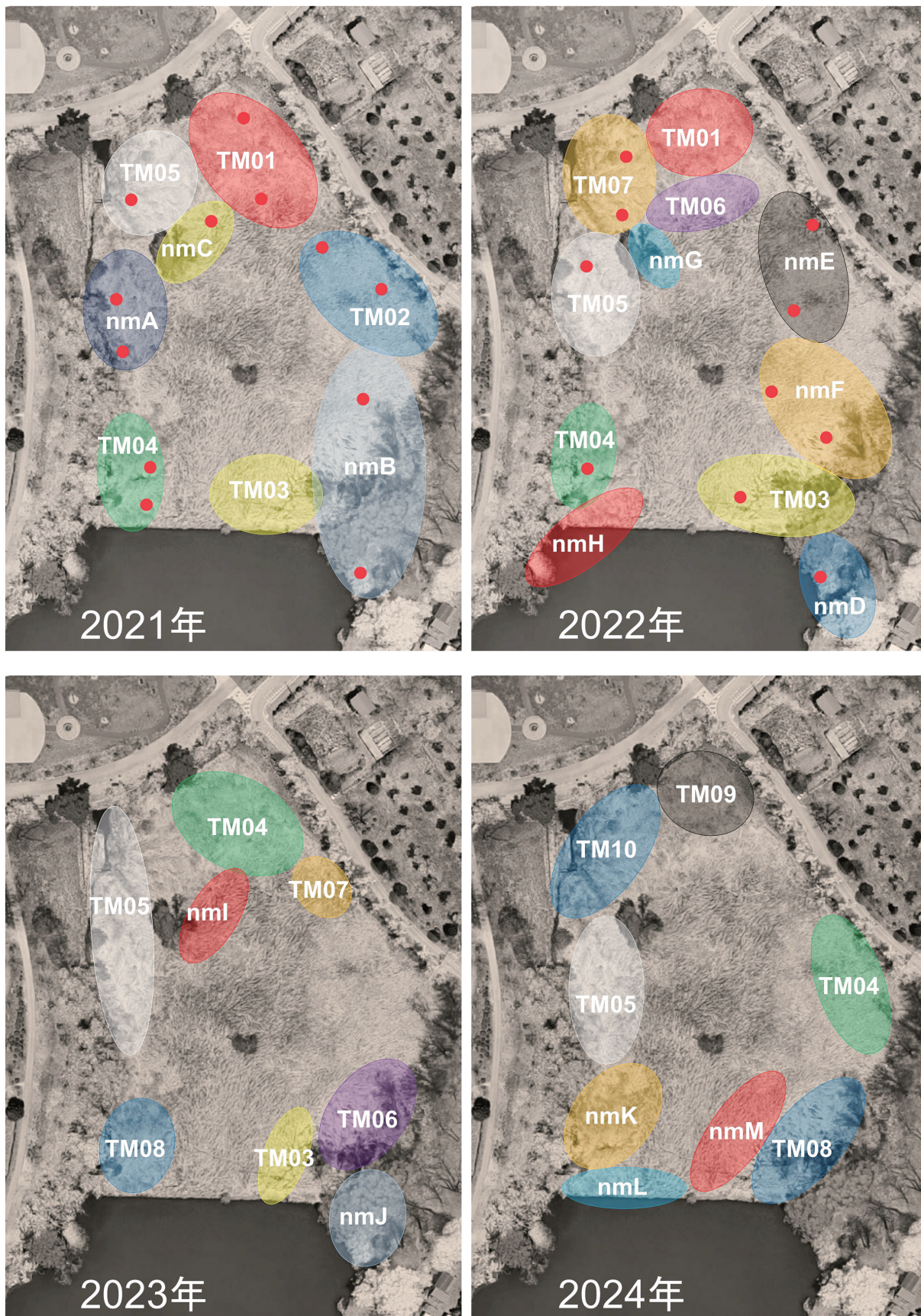


図8. 2021年（左上）と2022年（右上）のオオヨシキリ雄の縄張り（赤点）および2023年（左下）と2024年（右下）のオオヨシキリ雄の縄張りの位置. Google Mapより作図. 画像©2021Google, 画像©2021CNES/Airbus, Maxar Technologies, 地図データ©2021.

12. 高松公園芝水園の哺乳類

高橋 雅雄

調査方法

前述した「11. 高松公園芝水園の鳥類」のカメラトラップ調査にて撮影された哺乳類を選別し、種を可能な限り同定して撮影された哺乳類を集計した。分類と学名は川田ほか(2021)に拠った。

調査結果

7種とネズミ類2タイプが撮影された(表8)。撮影枚数が最も多かった小型ネズミ類は大部分がハタネズミ *Alexandromys montebelli*と推察されたが(写真148-149)、少数はアカネズミ *Apodemus speciosus*またはドブネズミ *Rattus norvegicus*の幼獣と考えられた(写真150)。大型ネズミ類はドブネズミと推察された(写真151-153)。イエネコ *Felis catus*は2022年にB地点とC地点で少数確認され、模様から別個体と判断できた(写真154-155)。ハクビシン *Paguma larvata*はA地点のみで冬に少数が確認され(写真156)、タスキ *Nyctereutes procyonoides*は周年記録されたが秋冬に多かった(写真157-158)。アカギツネ *Vulpes vulpes*もほぼ周年確認され(写真159-162)、2021年春夏のC地点では幼獣が撮影されたため(写真160)、当地で子育てしていたことが確認された。アナグマ *Meles anakuma*は初冬のみ少数が(写真163)、ニホンイタチ *Mustela itatsi*はA地点のみで冬に確認された(写真164)。ニホンカモシカ *Capricornis crispus*も冬に1例確認された(写真165)。

また、前述した「11. 高松公園芝水園の鳥類」のオオヨシキリの繁殖状況調査の際に、ニホンリス *Sciurus lis*・アカギツネ・アナグマ・ニホンカモシカを観察した。よって、確認種は計8種とネズミ類2タイプとなった。

考察

種を特定できなかったネズミ類2タイプは、捕獲して外部形態を詳細に観察・計測し、種を特定する必要がある。また、小型哺乳類としては、真無盲腸類(ニホンジネズミ *Crocidura dsinezumi*・アズマモグラ *Mogera imaizumii*・ヒミズ *Urotrichus talpoides*)やコウモリ類が確認される可能性があるだろう。中型哺乳類では特定外来生物に指定されたアライグマ *Procyon lotor*が記録される可能性があり、水辺の小動物に多大な悪影響を与えることから、その出現に注意を払う必要がある。実際に他の都道府県では、特に両生類が多数被害されることが報告されている(栗山ほか2021)。さらに大型哺乳類として、ツキノワグマ *Ursus thibetanus*やニホンジカ *Cervus nippon*も今後確認される可能性があるだろう。

引用文献

- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽創・姉崎智子・鈴木聡・押田龍夫・横畑泰志(2021)世界哺乳類標準和名リスト2021年度版。
<https://www.mammalogy.jp/list/index.html>(参照2025年2月28日)
- 栗山武夫・浅妻祐一郎・高木俊(2021)アライグマの分布拡大と在来生態系へ影響。環動昆 32(3): 131-136.

表8. 2020年冬～2022年秋に撮影された哺乳類.

	2020年冬 (11月・12月)		2021年春夏 (3月～8月)			2021年秋 (9月・10月)		
	A	B	A	B	C	A	B	C
小型ネズミ類		15			1			6
大型ネズミ類	11	13		3				
イエネコ <i>Felis catus</i>								
ハクビシン <i>Paguma larvata</i>	1							
タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>	15	9						
アカギツネ <i>Vulpes vulpes</i>	2	3			5			
アナグマ <i>Meles anakuma</i>								
ニホンイタチ <i>Mustela itatsi</i>	19							
ニホンカモシカ <i>Capricornis crispus</i>	1							
不明	2						1	
計	51	40	0	3	6	0	1	6
撮影枚数	134	75	90	106	1437	442	46	154

	2021年冬 (11月・12月)			2022年春夏 (3月～8月)			2022年秋 (9月・10月・11月上旬)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
小型ネズミ類		3	2	14	264	80		54	1
大型ネズミ類					8	36		3	
イエネコ <i>Felis catus</i>						2		2	
ハクビシン <i>Paguma larvata</i>	2								
タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>	6			2		1			1
アカギツネ <i>Vulpes vulpes</i>				2		1			
アナグマ <i>Meles anakuma</i>	1								1
ニホンイタチ <i>Mustela itatsi</i>									
ニホンカモシカ <i>Capricornis crispus</i>									
不明	5	1	1	4		3		1	1
計	14	4	3	22	272	123	-	60	4
撮影枚数	655	798	301	98	559	621	-	288	138



写真148. 2022年6月26日にB地点で撮影された小型ネズミ類(ハタネズミと推察).



写真149. 2022年7月1日にC地点で撮影された小型ネズミ類(ハタネズミと推察).



写真150. 2022年7月25日にB地点で撮影された小型ネズミ類(アカネズミまたはドブネズミの幼獣と推察).



写真151. 2020年12月5日にA地点で撮影された大型ネズミ類.

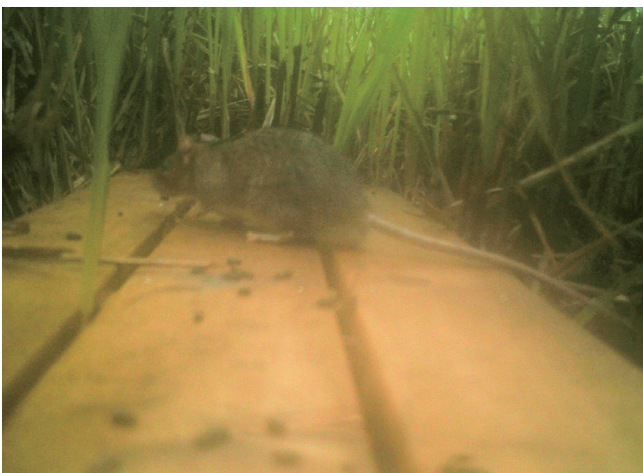


写真152. 2022年6月28日にB地点で撮影された大型ネズミ類.



写真153. 2022年7月24日にC地点で撮影された大型ネズミ類.



写真154. 2022年6月30日にC地点で撮影されたイエネコ.



写真155. 2022年9月12日にB地点で撮影されたイエネコ.



写真156. 2021年11月10日にA地点で撮影されたハクビシン.



写真157. 2020年11月27日にB地点で撮影されたタヌキ.



写真158. 2021年12月18日にA地点で撮影されたタヌキ.



写真159. 2020年12月20日にB地点で撮影されたアカギツネ.



写真160. 2021年6月14日にC地点で撮影されたアカギツネの幼獣.



写真161. 2021年6月21日にC地点で撮影されたアカギツネ.

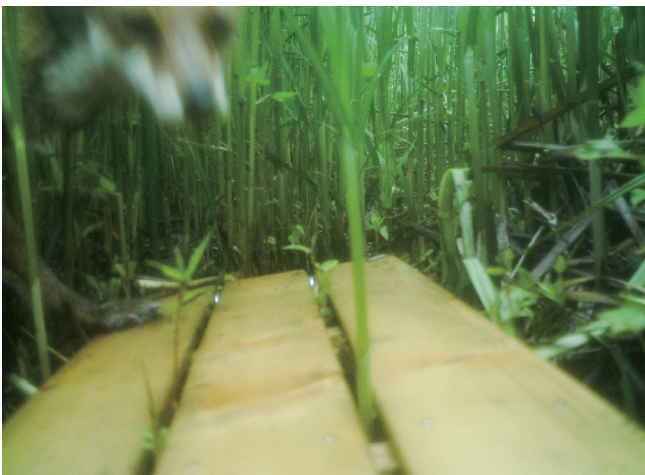


写真162. 2022年5月28日にA地点で撮影されたアカギツネ.



写真163. 2022年10月10日にC地点で撮影されたアナグマ.



写真164. 2020年11月21日にA地点で撮影されたニホンイタチ.



写真165. 2020年12月17日にA地点で撮影されたニホンカモシカの脚部.

13. 高松公園芝水園の保全上の課題と取り組み

高橋 雅雄

近年の保全活動の経緯

芝水園の湿性草原環境の保全について、2020年10月19日に日本野鳥の会もりおかから「芝水園のヨシ原の保全に関する要望書」が盛岡市へ提出され、2020年11月1日～2021年10月31日と2021年12月2日～2022年12月1日に環境調査のための湿性草原への立ち入りが許可された。ここに報告した調査の一部はその一環として実施したものである。高松公園環境整備協議会が2021年5月20日に開催され、湿性草原の現状と問題点および理想的な将来像が共有された(図9)。2022年10月14日に高松公園環境整備協議会を引き継ぐ高松公園環境保全評価会議(座長:松政正俊 岩手医科大学教授)が発足し、2022年11月9日に第1回、2024年2月19日に第2回、2025年2月5日に第3回が開催され、保全対策の提案と評価が行われた。その過程で、以下の保全の方向性が示された。

- ア 高松公園における風致のシンボルとして将来に向けて保全していく。
- イ 野鳥や生息する動植物等の生物多様性の保全に努める。
- ウ 水質浄化に寄与する植物の保全と水質浄化を目指す。

また、2022年度～2024年度に以下の保全策が実行され、2025年度以降も継続する予定である。

・定期的なヨシと湿生草本の枯死体の刈り払いと除去
湿性草原を南東～北西の4区画に分け、南東より順に1区画/年のローテーションで計画的に刈り払い除去した(写真166-168)。2021年度より開始し、指定管理者により毎秋(11月)に実施され、2024年度に一巡した。刈り払った枯

死体は指定管理者が芝水園外へ搬出して保管している。なお、2023年度の刈り払いのため2023年11月から芝水園の水位を人為的に下げた。

・湿性草原内の樹木の伐採と除去

上記の刈り払いの際に、刈り払い区画内にあった樹木を指定管理者が伐採し除去した。特に湿性草原内の北西側と中央部にあったヤナギ類の大木は、前者は2022年11月に、後者は2023年11月に伐採した。

・外来草本の除去

2023年7月に外周東側にて生育するオオハンゴンソウ *Rudbeckia laciniata* を指定管理者が除去した。根から抜き取るやり方で、除去したものは公園内で乾燥させた後に焼却処分した。2024年6月に外周北西側にてオオハンゴンソウを日本野鳥の会もりおかと指定管理者が同様に除去した(写真169)。

・ウキヤガラを試験的な除去

2024年4月に湿性草原中央部のウキヤガラ *Bolboschoenus fluviatilis* の群落の北側にて指定管理者が2 m四方×深さ30 cmの範囲の掘り取りを1ヶ所実施した(写真170)。9月の経過観察ではウキヤガラの新たな生育は確認されなかった。2025年4月に1ヶ所を新設し、計2ヶ所で経過を観察する予定である。

今後の課題

以下の内容が今後の課題として挙げられる。

- ・未調査の生物相（特に両生類相・爬虫類相・昆虫相・その他無脊椎動物）の種類相の把握
- ・ウキヤガラ単純群落の拡大要因の解明と拡大抑制のための効果的な対策の検討
- ・水位の季節変動の把握と湿生草本への影響の評価
- ・ヨシ群落やガマ群落の回復のための効果的な対策の検討
- ・湿性草原の環境維持を最小限の人為的管理で継続できる仕組みの開発

なお、今後は芝水園だけでなく高松の池や高松公園全体の環境保全にも注目すべきである。特に高松の池は、夏季のアオコの発生（写真171）と水質の悪化、冬季に飛来するガンカモ類への餌付けと鳥インフルエンザの発生、外来種（特にアメリカザリガニ*Procambarus clarkii*・コイ*Cyprinus carpio*・アカミミガメ*Trachemys scripta*等）の影響の評価と駆除の是非が主要な問題だが、これらは複雑

に関係しあっているため、専門家の調査結果や意見を取り入れた対策が必要である。また、水生生物（魚類等）の生物相は一部の無脊椎動物（菅ほか 2023, 2024）以外はほとんど報告が無く、その全容の把握が急務である。

引用文献

- 菅孔太郎・佐々木あゆ・伊藤えみ・松政正俊（2023）岩手県高松の池から採集された *Eucyclops roseus* Ishida, 1997（カイアシ綱, キクロプス目, キクロプス科）とその種内変異に関する考察. 岩手医科大学教養教育研究年報 58: 15-26.
- 菅孔太郎・佐々木あゆ・伊藤えみ・松政正俊（2024）岩手県高松の池から採集されたタイホクケンミジンコ *Thermocyclops taihokuensis* Harada, 1931（カイアシ綱, キクロプス目, キクロプス科）. 岩手医科大学教養教育研究年報 59: 21-32.

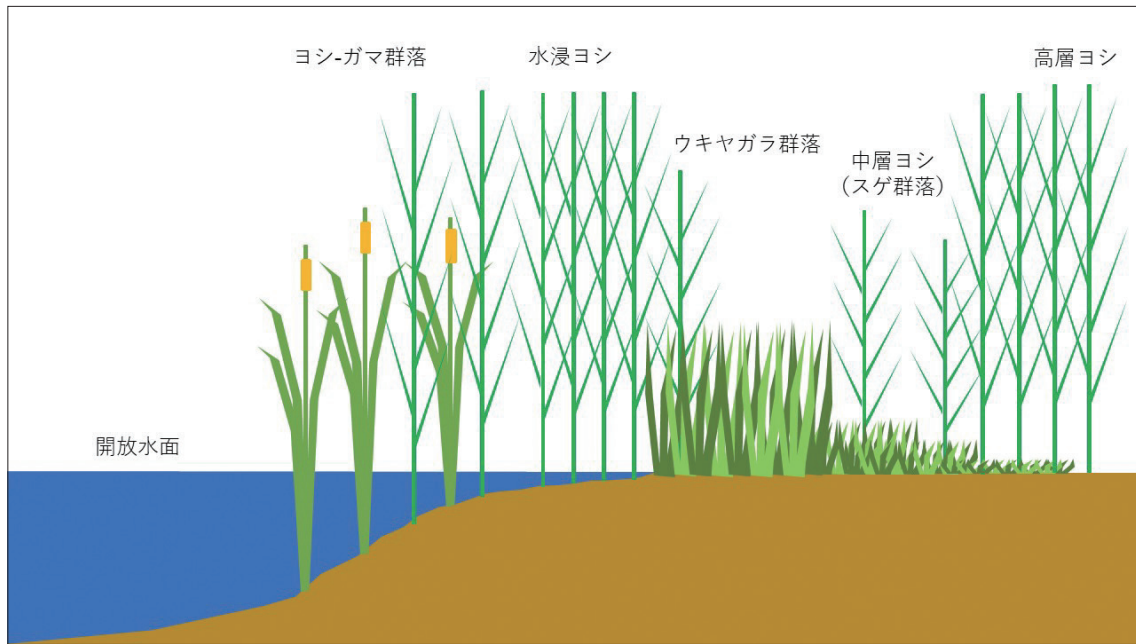
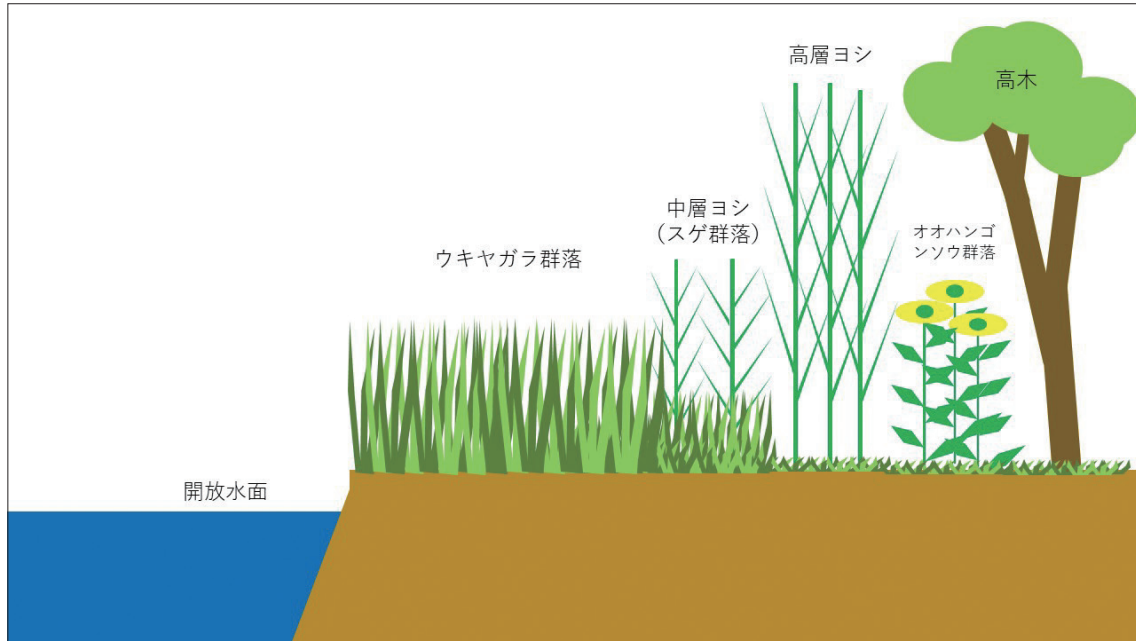


図9. 高松公園芝水園の湿性草原の現状（上）と理想的な将来像（下）.



写真166. 2021年度のヨシ刈り払い区画（2021年12月11日撮影）.



写真167. 2022年度のヨシ刈り払い区画（2023年4月27日撮影）.



写真168. 2024年度のヨシ刈り払い区画（2025年3月1日撮影）.



写真169. 2024年6月9日の日本野鳥の会もりおかによるオオハンゴンソウ駆除の様子.



写真170. ウキヤガラの掘り取り箇所（2024年4月26日）.



写真171. 2023年9月8日に高松の池で確認されたアオコ.

謝辞

春子谷地への立ち入り許可について、滝沢市、特に滝沢市教育委員会・滝沢市埋蔵文化財センター・観光物産課にお世話になりました。

高松公園芝水園への立ち入り許可について、盛岡市、特に都市整備部公園みどり課にお世話になりました。野外調査では、日本野鳥の会もりおかの皆さまに助力をいただきました。保全については、松政正俊博士（岩手医科大学教授）と島田直明博士（岩手県立大学教授）より助言をいただき、指定管理者である株式会社寿広に試案を実施していただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

岩手県立博物館調査研究報告書第38冊

春子谷地と高松公園芝水園の動植物

令和7年3月31日発行

編集 高橋雅雄（岩手県立博物館）
〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34番地
TEL 019-661-2831
FAX 019-665-1214

刊行 公益財団法人岩手県文化振興事業団

デザイン 株式会社白ゆり

©Iwate Prefectural Museum 2025

Printed in Japan